『禪門寶藏録』の研究

西口芳男

第一章　選者考……六五四
第一節　はじめに……六五四
第二節　萬徳山白蓮社第四世真静国師……六五七
第三節　通奥真静大師……六七二
第四節　まとめ……六七六
〔註〕……六七八
〔付録〕1　訓註「答芸臺亞監閔昊書」……六八四
〔付録〕2　訓註「答霊岩守金郎中惇書」……七一七
第二章　本文研究……七二三
第一節　はじめに……七二三
第二節　『禅門宝蔵録』の諸本について……七二四
第三節　本文研究……七二七
三―一　『宝蔵録』の典拠と引用書目……七二七

三―二　禅教対弁門……七四六
三―三　真帰祖師について……七五〇
三―四　『宝蔵録』に見る高麗祖師禅……七六三
第四節　おわりに……七九三
〔註〕……七九八

第一章　撰者考

第一節、はじめに

『宝蔵録』の撰者を万徳山白蓮社第四世の真静国師とする説が、文献の上で確認できる上限は、乾隆二十九年（一七六四）の采永の後跋を有する『西域中華海東仏祖源流』（以下『仏祖源流』と略称す）であろう。散聖章の高麗祖師の条に、

眞静国師。諱は天順。至元（一二六四―九四）の間に室薄録及び東海伝弘録を集む。（『韓国仏教全書』一〇―一三〇中）

とあり、天順は天頂の誤刻（或は校正のミス）と考えられる。しかし『宝蔵録』のことを言わぬために、真静国師の名を天頂とするのは『宝蔵録』の序によったものなのか、古伝によったものなのか不明である。

『仏祖源流』の采永の後跋によればその刊行の経緯は次のようである。懶翁慧勤（一三二〇―一三七六）の法嗣である無学自超（一三二七―一四〇五）が仏祖より指空・懶翁までの伝鉢源流次第を刊出し、月渚道安（休静下三世、一六三八―一七一五）は太古普愚（一三〇一―一三八二）より休静下一世の玩虚円俊・松雲惟政（一五四四―一六一〇）までの系譜を加えて重刊した。しかし重刊本に遺漏して伝わらなかった名師大徳が多くあり、そこで八路を周遊して諸派の記録しておくべき文を収集し、諸山の碩徳と公論し、伝灯を考察して系譜の次第を定め、法嗣がなく系譜に入らず、しかも泯没してはならない祖師についてはまとめて一部となし、それらを合して成ったのが『仏祖源流』だという。[1] してみると散聖章は、采永が月渚の重刊本を増補して出版したときの増補部分の一部に相当すると考えられる。白蓮社の真静国師の名が天順（恐らくは天頂を誤る）であり、『室薄録』の撰述があったことは『仏祖源流』以前にさかのぼれる資料があることは報告されていないように思う。いったい采永は何に拠ったのであろうか。

『奎章閣図書韓国本総目録』によれば、采永の後跋を有する乾隆版『仏祖源流』(以下乾隆版と称す)の他に崇禎三癸酉の年紀の入った蘇東軾の序と李浩の跋を有する写本(後写)の『西域中華仏祖源流』(以下崇禎本と称す)が存在することを記載している[2]。崇禎三年は一六三〇年に当り、癸酉は一六三三年[3]であって食い違うが、恐らくは「三」は「六」の判読ミスか誤写であろう。この崇禎本は六一張であり、乾隆版の一一〇張よりもかなり分量が少ない。朝鮮総督府『朝鮮図書解題』には、乾隆版の解題と並記して崇禎本の解題が次のように記載されている[4]。

西域中華海東佛祖源流　一冊　釋旿妙編

寫本

圖書番號　一一〇七四

僧旿妙か釋采永の編したる同名の書を抄録編次したるものにして蘇東軾の序及李浩の跋あり。

これに拠れば崇禎本の編者は釈旿妙のようであるが、『奎章閣図書韓国本総目録』は編者未詳とし、「釈旿妙か釈采永の編によるところ」と括弧書きが付いている。崇禎本を披見できないので、釈旿妙が崇禎本とどのように関わるのか推測しかできないが、編者と見てよいのであろう。

では乾隆版と崇禎本はどう関わるのであろうか。全く同じ署名を持ち、崇禎本は六一張、乾隆版は一一〇張であることから、崇禎本を増補して成ったのが乾隆版だと推測できそうなのであるが、采永の後跋には崇禎本のことは何も言及されていない。采永は崇禎本のことを何も知らずに偶然に全く同じ書名を著けたのだろうか。八道を周遊して文を収集し、諸山の碩徳と公論していたのであるから、崇禎本のことを知っていたと思われ、また月渚の重刊本は『仏祖宗派之図』[5]という書名であって法系図であるけれども、乾隆版は図ではなく世代ごとに祖師名を記し、核になる著名な祖師については簡単な伝記を付したものであり、恐らくは崇禎本も同じ形式であることから、采永は

崇禎本を参照していたに違いないと考えられる。また康熙十二年癸丑（一六七三）の刊記と跋を存し、成化二十二年（一四八六）の序のある『釈氏源流』[6]は法系図のようであるが、王勃撰『釈迦如来成道応化事蹟記』が附されている。乾隆版の巻首にも王勃撰の『釈迦如来成道応化事蹟記』が録されているのは『釈氏源流』より採ったものであろう。このように乾隆版『仏祖源流』は崇禎本や『釈氏源流』などの先行する多くの諸資料を参照して成ったものであろう。もし真静国師について乾隆版と同じ記載の先行資料が見つかれば、白蓮社真静国師が天頂の名であったとする伝説の年代を遡らせることができる。

『仏祖源流』は『宝蔵録』の撰者である天頂と白蓮社真静国師を同一人と見ていたかどうか曖昧なところがあるが、はっきりとこの見方を打ち出して真静国師の伝を立てたのは『万徳寺志』である。丁若鏞（号は茶山、一七六二―一八三六）が一八〇一年の天主教弾圧である辛酉教獄によって全羅南道の康津（白蓮寺に十キロメートル）に配流され、一八〇八年よりの一〇年間、茶山に住したとき、寺僧の騎魚慈宏等の五僧が編輯校正し、丁茶山が鑑定して成ったものである。[7] 一八九四年に覚岸（一八二〇―一八九六）が撰した『東師列伝』巻一の真静国師伝は『万徳寺志』を踏襲しながらも天頂と天因を同一人として混同している。忽滑谷快天『朝鮮禅教史』は『東師列伝』の混同をそのまま受け継ぐ。

以上のように『宝蔵録』の撰者である天頂と白蓮社第四世の真静国師を同一人とする見方に対して、異議を唱えたのは高橋亨（「白雲和尚解題」『白雲和尚語録』所収、京城帝国大学、一九三四）であり、それより四十五年後にほぼ同じ結論に達した高翊晋「白蓮社の思想と天頂の著述問題」[8]（『仏教学報』第十六輯、東国大学仏教文化研究所、一九七九）である。高翊晋論文が発表された同じ年、蔡尚植「普覚国尊一然に対する研究」[9]（『韓国史研究』二六、韓国史研究會、一九七九）は、一然の碑を立石した内願堂通奥真静大禅師清玢（法珍とも翻刻）は宝鑑国師混丘（一二五一―一三二二）であり、内願堂真静大禅師天頂に他ならないと断定する。しかし一方では許興植氏[10]や李永子氏[11]は『万徳寺志』の見方を承認する。これらの韓国における最近の学説は、本書の中鳥志郎氏の論文にまとめられて論じられているので参照されたい。

『万徳寺志』の見方を否定して別人とする立場、一然の弟子である混丘を『宝蔵録』の撰者天頂と同定する立場、依然として『万徳寺志』を承認していく立場が併存している。一体どの立場が最も妥当なのか、或は新たな説が立てられるのか検討を加えることとする。

第二節、万徳山白蓮社第四世真静国師

白蓮社真静国師については、最近その詩文集である『湖山録』の写本が二点発見された。一本は松広寺所蔵の「大正五年丙辰十二月日大興寺長春院完燮書」という筆写の記を有するもの[12](以下松広寺本と称す)、もう一本は一枝庵本[13]と呼ばれ一八〇〇年の初め頃に書写されたものである。全体は四巻二帙であったが、巻三と巻四が残存し、巻三が詩集であり、巻四が文集となっているが、松広寺本と一枝庵本は同一ではない。巻三の詩集では真静国師の奉答詩だけではなく、居士が国師に献じた詩も并録し、一枝庵本が計一七八首を録すのに対して松広寺本は居士の献詩と国師の奉答詩を中心にして六九首を録し、一枝庵本の半数にも足りない。更に一枝庵本が詩に対する序が完備しているのに対して松広寺本は欠如している。巻三の詩集では一枝庵本は『湖山録』に近い形が保たれた善本であり、松広寺本は一枝庵本によって比較すれば順序に出鱈目なところがあり、抄録・撰録したものというよりは断片を寄せ集めた感を免れない。巻四の文集では一枝庵本が十三件の文を録すのに対して松広寺本は十七件であり、そのうち六件が重複するだけであり、順序も整然としている。従って互いに補完し合う関係にあるといえよう。

『湖山録』は大徳十一年(一三〇七)に書かれた真鑑大禅師無畏丁午の「跋真静湖山録[14]」によれば、国師の門人である而安が録して集成し、自ら出資して刊行したものである。その後、成化十四年(一四七八)に成った『東文選』巻十四に在家弟子との奉答の詩が一部分採録された他に、金宗直(一四三一―一四九三)の撰に成る詩文選集『青丘風雅』に「安峯寺」と題する詩一首が採られており[15]、刊行されてより一七〇年後の頃にも流通していたことが知られる。しかしその後

は十九世紀初に丁茶山鑑定『万徳寺志』の編纂時に抜萃して引用収録され、また茶山がその詩を読んで感激し、「題天頂国師詩巻」を作るまで具体的な消息が分かる記録は見当らない。その「題天頂国師詩巻」に次のようにいう。

此れ高麗の名僧天頂賜號眞靜國師なる者の詩文遺集なり。本と四卷二帙なるも、其の半は隣寺の首座僧の竊む所と爲る。蓮潭有一（一七二〇―一七九九）は嘗て之を鉤取せんと欲すも、竟に得ず。[16]

更に『万徳山志』巻二の第四真静国師条にも、

其の遺稿四卷を湖山録と曰い、分かれて上下二編を爲す。其の上編は數十年前に淨水寺の首座の竊む所と爲る。今存する所の者は下編なり。[17]

とある。これらによれば元本は四巻上下二編（四巻二帙とも）であったが、『万徳寺志』編纂当時よりも数十年前に浄水寺の首座によって上編が盗まれ、蓮潭和尚が探し求めたけれども見つからなかったと言う。丁茶山は下編しか見ていなかったのであり、『万徳寺志』に抜萃引用されたものは松広寺本・一枝庵本にほぼ全て現存しているから松広寺本・一枝庵本共に元本の下編に当るものと考えてよいだろう。『万徳寺志』に抜萃引用されていながら現存する『湖山録』に見えないのは、「入院祝上疏」（四四頁）、「和法雲卓然詩序」（四五頁）、「寄金承制書」（四七頁）、「跋真静湖山録」（五五頁）の四件だけである。これらも本来は『湖山録』に存したものと考えられる。跋は奥書であるから下編の末尾にあったものと思われ、巻四は疏・記・願文・書などの文を収録したものであり、松広寺本にも一枝庵本にも書写に遺漏があることから「入院祝上疏」「寄金承制書」は下編巻四に収録されていたと推測される。「和法雲卓然詩序」については、一枝庵本の巻三が元本の完全な姿を保っていると見るならば、『青丘風雅』の「安峯寺」詩と共に上編に録されていたと考えられる。

現存する『湖山録』は近年の写本であるが、その出所は而安の集成にまで遡ることができ、『東文選』も『万徳寺志』も『湖山録』に拠っており、『湖山録』をもって第一資料として良い。既に韓国では『湖山録』に拠る伝記・思想の詳しい研究成果が報告されている[18]が、筆者なりに整理してみることにする。以下『湖山録』については許興植著『真静国師と湖山録』(民族社、一九九五)の翻刻に拠り、許興植本一三三頁以下に見える「湖山録の目録対照と補完」表に拠って作品タイトルと作品番号を明示する。例えば((巻3)21-1-32)は巻三の題二一番目のタイトル「次韻答判秘書閣金坵」の第一首目、巻三の全詩の通し番号の三二首目を表わしている。

真静国師の若き日の行状及び思想を知るうえで重要なのは「答芸台亜監閔昊書」((巻4)22)である。曽て京師で同舎生であった閔昊からの手紙に対する返事であり、一二四二年の正月に書かれたものである。閔昊の手紙の内容は詳しくは不明であるが、曽て儒者としての官僚の道を捨てて若くして仏法に帰した学友が、万徳山に普賢道場を立て、白蓮社を結んで仏教の布教に勤めていることを聞き、励ましの手紙とともに袈裟などを贈ったもののようである。それに対して国師は、七～八歳のころに読書を始めた生い立ちから語り出して弱冠にして登第し、将来を嘱望されていたにもかかわらず釈に帰した理由を情熱をもって述べ、人生は虚幻不実であり、仏教の因果不昧なることを印度・中国・韓国(海東三韓・新羅・高麗)へと伝わった仏教の歴史を通して具体的に語り明かすことをもって返書とした。現存の『湖山録』の中で最も長文であり、しかも力のこもったものとなっている。

この「答閔昊書」によれば、国師は高麗建国の功臣である申厭達の孫(「游四仏山記」では十一世の孫)であり、母方の祖は起居注の冲若である。七～八歳の時に読書を始め、十五歳の時には歴史書から詩文にいたるあらゆる文章の体に通暁した。十七～八歳の頃に科挙の試験に赴き、春には名が官吏の名簿に載り、秋には辟雍に入り、一年を経た弱冠のときに春官に擢第した。しかし儒雅の身は仏法に反するものだと猛省し、出家したいと思い悩んで伯父に相談す

るが、「仏法は心に在るのだから出家する必要はない、不孝のうちで子孫がないことこそ最大である」と諫められる。しかしその思いが断ちがたかったところ、丹桂主人清河相国の人材を育てようとする恩重を被って金字法華経の書写をすることになり、蓮経に「諸仏世尊唯以一大事因縁故出現於世」「正直捨方便、但説無上道」とあるのを見て決心が固まる。そして万徳山に赴く様子を次のように述べている。

幸得同志者二人、潜發啓行、於千里道途、艱險備嘗之矣。計月餘旬日始參、所謂萬徳山。地僻人稀、寂無來往。但見雲岑烟島、掩映乎蒼茫間、脩竹清溪、可遨可賞。唯尨眉老衲四五輩、出門笑迎。遂居稻田、傅相譯述、水邊林下、長養聖胎、象外壺中、揩磨道眼、始立普賢道場、弘揚開顯佛乘、力行前代之不行、使覺後人之不覺、以今十四年矣。

同志二人と共に万徳山に赴いて出家したことについては、崔滋撰「万徳山白蓮社円妙国師碑銘并序」に

至戊子夏五月、有業儒者數人、自京師來參。師許以剃度、授與蓮經、勸令通利。（『朝鮮金石総覧』上五九一頁）

とあり、林桂一撰「万徳山白蓮社静明国師詩集序」には、

即謝世、與同舍生許迪・前進士申克貞拂衣長往、抵萬徳山、參圓妙國師。（『東文選』巻八三）

とある記述は、同一の事柄を各々の側から述べたものと見られる。前進士の申克貞とは真静国師のことであり、天因・許迪と共に万徳山の了世円妙国師に参謁して出家したのは戊子（一二二八）夏のことである。この時の年齢については、金禄延の献詩に対する奉答詩「次韻答中書舍人金禄延」（〔巻3〕23-1-37）の起聯に「逃名入社豈徒然、正是蘇山妙悟年」とあり、その注にいう、

天台智者は二十三にして始めて大蘇山の思大法師に謁し、法華三昧を妙悟す。我輩も亦た年二十三に至って始めて圓妙に謁す。聖凡は殊なると雖も、遺躅に遵うが似し。故に此れを云うに及べり。

これによって一二二八年当時、二三歳であったと分かり、逆算によってその生年は一二〇六年のこととなり、天因より一年下の後輩である。また一二二八年から十四年後は一二四二年であり、国師三七歳のときに「答閔昊書」が書かれたのである。その間に諸方を遊歴し、菩提達磨に始まる禅宗・天台・華厳・起信論・唯識法相・毘尼律宗・大乗・小乗・頓説・漸説などの中国に起った仏教諸宗派を学び、一二三二年には普賢道場設立に際しての「普賢道場起始疏」(〔巻4〕1)、また一二三六年には円妙の命により「白蓮結社文」(『万徳寺志』冒頭の年表による)を物している。

次にはっきりと年次の判るものに、申辰(一二四四)八月からそんなに隔たらない時期のものと思われる「游四仏山記」(〔巻4〕13)がある。これは崔滋が高宗二八年の越歳(一二四一)に尚州に出守したとき、山陽県の北の四仏山に、曽て義湘や元暁が住したときの遺物が残っている米麺社とも白蓮社とも呼ばれる古寺を見つけて感激し、殿宇を一新して米麺社を再建し、名筆として名高い曹溪山修禅社の卓然に功徳山白蓮社の書を請うて榜額とした。そのとき真静国師を梵席の主盟にと崔滋が状聞し、申辰八月に始めて尚州功徳山白蓮社に到り、近くの四仏岩や大乗寺に游んだときの記である。ここに功徳山白蓮社(米麺社)が新修されるが、江東に在るので東白蓮社と呼び、湖南にある万徳山を南白蓮社と呼んで区別される。東白蓮社主としてしばらく住していたと思われるが、これ以後の足跡は『湖山録』の作品の製作年代の判明するものによって断片的にしか分からない。

南白蓮社即ち万徳山白蓮社は一二四五年夏に天因が継いで第二世となり、一二四八年秋に示寂するに当って弟子の円皖に付嘱している。『万徳寺志』に引かれる「真静入院祝上疏」にいう、

弟子早捨文章小枝、獲參圓妙老師。又曰、昔承人乏、曽駐跡於四佛山。今又我何俾主盟於萬徳山。[19]

また『釈迦如来行蹟頌』の天歴三年（一三三〇）の万徳山白蓮社沙門豈の跋によって白蓮社第四世であったことが確認でき[20]、東白蓮社主となった後、第三世円皖の後を襲って白蓮社第四世となった。しかしその時期については明確にすることができない。以下に作品の製作された年代を列記する。

高宗四六年（一二五八）〈五三歳〉「卓然示す所の祖師讃等に讃す」（〔巻3〕44）。

高宗四七年（一二五九）〈五四歳〉「為主上救病疏」（〔巻4〕8）。

中統三年（一二六二）〈五七歳〉「法雲然禅老伝える所の大宋延慶寺諸尊宿の法華随品讃一軸に和して讃を成ず」（〔巻3〕43）。

丙寅仲秋（一二六六）〈六一歳〉、王禹偁の西湖蓮社詩の起聯に「夢幻吾身是偶然、労生四十又三年」とあるのに惻然として感有った林桂一がその詩に次韻して献じた「林桂一献詩并序[21]」（〔巻3〕10-1-16）とそれに対する「奉答詩并序」（〔巻3〕11、〔巻3〕11-1-17）。これがきっかけとなって、李蔵用（〔巻3〕16-1-25、一二〇一～一二七二）・金圻（〔巻3〕20-1-31、一二一一～一二七八）・金禄延（〔巻3〕22-1-36）・郭汝弼（〔巻3〕24-1-38）・柳璥（〔巻3〕26-1-40、一二二一～一二八九）・鄭興（〔巻3〕30、〔巻3〕30-1-45、〔巻3〕30-2-46、?～一二九八）・珍鳥縣令于勉（〔巻3〕32-1-49）が次韻した詩を献じている。于勉の献詩、及びこの頃（一二六八年か）のものと思われる金惰の献詩（〔巻3〕34-1-52）に「寄呈龍穴大尊宿丈室」とあることから、この頃には龍穴庵に退居していたものと推測できる。

一二六八年〈六三歳〉、「寄金承制書[22]」。この書にいう、「老僧は禅誦の暇に海東法華傳弘録（或は曰う、現應録）を撰し、将に以て世を勸發せんとす。…越歳、丙申春（宋の理宗の端平三年）に在りて、先師は我に命じて白蓮結社文を撰せしむ、将に刊行せんと欲して已に卅三年なり」。略節されていて分かりにくいが、これによって『法華伝弘録』の

刊行がこの頃であったと推定される。[23] また「答霊岩守金郎中惰書」(〔巻4〕24)、「郎州(霊岩)守金惰献詩一首」(〔巻3〕35-1-53)とそれに対する「奉答詩二首」(〔巻3〕35-1-53、〔巻3〕35-2-54)もこの頃であろう。

一二六九年〈六四歳〉、「鄭興献詩四首并跋」(〔巻3〕36-4-58)及び「奉答詩三首并序」(〔巻3〕37)。

『湖山録』中の最晩年の記録は「次韻答李尚書入社長句」(〔巻3〕29-1-44)であろう。その起聯にいう、「山僧行止便翛然、卜入雲峰五十年」とあり、一二二八年に万徳山に入って五十年ということであるから、一二七七年のこととなるが、詩中にいう五十年が実数であるかどうか疑わしい。李頴との最初の出会いは、「答林正言桂一并序」[24](〔巻3〕11)及び『東国輿地勝覧』巻三七康津県古跡の「仙山島」「法華院」の条の記載[25]によって、李頴が莞島の象王山に貶謫されていた一二五〇年頃である。李頴献詩の序(〔巻3〕28-1-43)では、国師と別れて二十二年を経たこと、三別抄が反乱を起して珍島を根拠地にして沿海の州県を荒らしまわり、白蓮社もこの難に遭い、年老の国師がどこに難を避けていたのか心配していたが、然禅の書によって恙無きを音聞して喜んでおり、今は珍賊(珍島の賊の意か?)は敗潰し、国患は小康を保っていることが述べられている。[26] 元宗の蒙古への服属に反対する武臣勢力である三別抄の反乱は一二七〇年六月一日に起り、すぐに江華島より珍島に移り、一二七一年五月十五日に陥落するまでの一年間、ここを根拠地に活動し、その後は耽羅島(済州島)を拠点に一二七三年四月まで戦が続く。[27] 李頴がその献詩の起聯に「莞島攀援尚宛然、回頭二十二当年」というように莞島貶謫より二十二年後に出した消息は、珍島での三別抄の反乱が鎮圧されて小康を保っていた時期、即ち一二七一年五月十五日以後のことであり、二十二年前というその起点が必ずしもはっきりとしていないため、一二七二年前後から一二七七年頃の時期であるという大雑把な推測しかできないが、これが真静国師の生きていた年代の資料的下限となる。

『湖山録』の跋を書いた無畏丁午に「庵居日月記」があり、この頃以後に白蓮社に住庵したことを次のように記録し

ている。

越えて戊寅(一二七八)の春、予始めて鼇山縣[28]の龍穴庵に寓し、庚辰(一二八〇)の夏、遷って尚州の界に向う。また庚寅(一二九〇)の春、復た掛搭庵に來たる。及ち吾が從祖の重創する所なり。…中略…且らく予平生居止すること、未だ嘗て終三年留まらず、而れども此の庵に栖すこと今十三年なり。殆は水土の縁深きか。然れども未だ長住して行かざること有らざれば、故に今卜して寶月山白雲庵を得て焉に移れり。年月・因由を追記し、留めて後觀と爲す。(『東文選』巻六八)

朴全之撰「霊鳳山龍厳寺重創記[29]」(『東文選』巻六八)によれば、無畏は大徳六年(一三〇二)に月出山白雲庵に移住し、願刹の妙蓮社に迎えられ、以後、白蓮社出身の天台宗重鎮として都で活躍する。「庵居日月記」によれば、無畏丁午は一二七八年から一二八〇年までの三年間、龍穴庵に住庵しているが、そのとき既に真静国師はここにいなかった。その理由は示寂していたからか、他処に移住していたかの二つしかない。どちらの可能性が高いかといえば示寂説の方であろう。

丁午が真静国師に師事しなかったことは、「跋真静湖山録[30]」によって判明するし、またその書きぶりから全く面会したことがなかったことも窺える。そもそも而安はなぜ一二七〇年前半までの国師の作品しか収録しなかったのだろうか。至元三十年までの約二十年の晩年は決して短いものではない。もし生きていたなら更に数多くの作品が生まれていたはずであり、一三〇七年の出版までに収集するのに十分な時間もあったはずである。盗まれた上編にだけしか一二七〇年以後の作品が入っていなかったために見られないのだという理由付けは考えにくい。なぜなら残存している下編の構成を見ると、巻三は結社に入った在俗信者の献詩とそれに対する国師の奉答詩を中心に集められたものであり、巻四は疏・記・書などの文を集めたものであることから、上編は必ずや作詩を中心に編集されて

いたはずである。それなら下編に当る巻三にも一二七〇年以後の献詩や奉答詩が入っていていいはずだし、巻四の文集にも同じことが言える。このような疑問に対して最も妥当な解釈は、一二七〇年代の前半に真静国師は示寂していたと考えることであろう。高翊晋氏が一二七七年頃には入寂していたと推定されている説に賛成する。

許興植氏は『万徳寺志』に依って、白蓮社第四世真静国師と真静大禅師天頂蒙且の同一人説を主張する。そのなかで「次韻答閑禅老」(〔巻3〕4-1-9)に言う「嵓阿寂寞として來往無し、却って喜ぶ清詩の老蒙を慰むことを」の句中に見える老蒙の蒙とは、天頂蒙且の蒙のことであるから、同一人だとする。[31] 確かに年老いた自分のことを老蒙と自称しているのに違いないわけであるが、蒙の字を使うのは謙称の意であると同時に次韻によるものであり、名が蒙且だから蒙の字を使ったのでは決してない。そもそも白蓮社四世真静国師の名を天頂とすることは、現存する『湖山録』に見られぬし、他の古い資料中にも見い出せない。『仏祖源流』に於て始めて諱天順(順は頂を誤るか)とするけれども、その根拠は詳らかではない。林桂一撰「静明国師詩集序」[32]では、天因は示寂するに当って書を法弟の天吉に寄せているが、天因と真静国師の親密なかかわりから考えれば、法弟の天吉とは真静国師その人に擬し得る。

次に国師の思想傾向を窺ってみよう。真静国師の仏教に対する思いが最もよく吐露されているのは、閔昊への返書である「答芸台亜監閔昊書」に於てであろう。閔昊の来書中に、第二十二祖摩拏羅尊者が太子であったとき、鼓腹をもって敵の象兵を退けたという故事[33]を述べることによって真静国師が仏法を修めて国家や民を安んぜしめんことを期待していたらしく、それに対して国師は因果歴然として不昧なることを釈迦仏より説き起し、三韓・唐・新羅に及ぶまで、その具体的な事跡を挙げて国家の興亡と仏僧の関係を説き、総括していう、

若し過現の縁熟すときは則ち一毫をも費さずして、聖必ず自ずから救い、若し過現の縁無くんば則ち百計を設くると雖も、聖も亦た如何せん。若し皷腹の用のみ獨だ是と爲せば、則ち世尊・文殊より中華・東國の天下の諸聖

は非なり。須らく一状に領過すべし。當に因果に感應するの理を知り、須ず四句分別を作すべし。

国師のいう四句分別とは、衆生の機の善悪の業とそれに応ずる聖仏の感応の関係を冥機冥応（過去の善悪の業の果が現世に現われない場合）・冥機現応（過去のそれが現世に現われる場合）・現機現応（現世の善悪の業の果が現世に現われる場合）・現機冥応（現世のそれが現世に現われない場合）の四句にまとめたものであり[34]、このような機と仏の感応の関係が理解されれば、世間の不条理に見えることもそうではなく、仏法には必ず霊験があるのであり、生を喜び死を憂うというようなこともなくなり、信力堅固で、燃えあがるような誓願があってこそ仏法をよく荷担することができると説く。さらに霊山会上での仏乗の開顕（即ち法華経）が、この国に縁のあることの理由を次のように説明する。

昔聖祖（高麗太祖）の草剏の際、福田を行營し、能く兢んで親しく傳えしは道侂の「三乗は一乗に会し、三觀は一心に在るを以て、甚深の妙法は我が會三の國に合せり」と聖決し、天聰に上奏するが故なり。宣王三年に至って大覺國師は宋に入りて求めて此の土に傳え、此の會三帰一の宗を奉じ、此の會三合一の基を福う。其れ來たるや尚し。然れども此の秘要の藏は、如來の現在にすら猶お寃嫉多し、況や滅度の後をや。佛語分明、「後世、百六の會を運り鍾ねるに比及で、或は頓廢と爲る」と。故に有識者は皆な矗然として心を傷ます。幸にして今、聖主・賢臣、誠を翹げて外護し、願を發して中興せんとす。豈に一大事、霊驗無けんや。夫れ會三の風土、相い合するの旨は、但だ道侂の始めて説くに非ず。昔天台の第九祖荊溪禪師、法花記中に於て、曽て解釋し、符節に合するが若し。其の文甚だ詳なり。……吾が国は太平を庶幾う。若し妙法の旨を擧揚せんとせば、一切衆生の十二時中に、現前する妄念こそ即ち是れ一大事なり。豈に此の外に別に求むる道理有らんや。故に云う、「阿鼻の依正も、全て極聖の自心に處り、毘廬身土も、下凡の一念を逾えず」と。刹説き塵説き、色徧心徧なること、但だ衆

生は長劫に用いて理むるも、長劫に知らず。偏空の二乗は、愚駭受けず。漸修の大師は、疑惑未だ除かず。唯だ圓頓の行人のみ初心にして、佛と不二なるを能く信ず。云々

長い引用になってしまったが、国師の仏法への思いがよく語られている。会三帰一の法華経、三観一心の旨を宗とする天台宗こそが、三韓を統合した高麗の風土にとって最も縁のある仏法であり、法華経の書写受持読誦の善縁を値えることによって聖仏が感応して国や民の災患を除いて安康が保たれるのであり、過去現在に縁を値えなければ、いくら百計をめぐらしても聖仏もいかんともしがたいのである。国師のいう因果不昧とはこのことである。

鼓腹は上古の帝王の時代、無為にして国がよく治まり、民が楽しんで遊ぶ平和な世のありようを象徴するものであり、絶学無為の閑道人を理想とする禅宗では天子の徳をたたえたり、本来無事のありようを謳歌するものでもある[35]。もとより摩拏羅尊者が鼓腹一喝して悉く皆な振動させて地に伏せしめたのは、尊者の神通力によるのであるが、そのような因果を越えた個人の神通だけを是とするのでは、世尊も文殊も中華東国の諸聖も一通の判決状で断罪してやると息巻き、因果感応の理を知らなければならないとするのは、禅では満足できない国師の仏法の体質を物語るものであろう。

胡寇によって南海の一庵に難を避けていたとき、食料の調達に困り、たまたま相国の所有する荘園の近くに住庵していたので施納を請うた「読大藏住庵請田文」に言う、

才力の善逝は心を語って經と爲す。則ち凡そ東傳の根葉の教えは是れ他物に非ず、皆な佛心なり。如し佛乘を學んで佛子と爲らんと欲せば、茲れを捨てて何を以てかせん。昔、從義は訓を立てて曰く、「禪和の輩は諸家の語録を貪り看むこと少なからざるに何ぞ佛の語録を看まざるや」と。貧道は不佞なれど早くに祖域に參じ、粗ぼ西來の旨を究むるも、更に信誠を發し、將って藏教を温尋して道業を資くるを日課と爲すこと年數有り[36]。云々

国師自身が「早参祖域、粗究西来意」と語っているように禅録をかなり読んでいたらしく、その証拠は『湖山録』後半の文書の中に見える。しかし、西来意を究めたにもかかわらず、さらに蔵教を温習して道業の資助とする立場は不立文字・教外別伝の禅の立場ではない。禅では満足できないこのような国師の思想的体質は晩年まで一貫して続く。一二六八年(六三歳)に霊岩太守の金惰への答書にいう、

諭を承りました。具匣の蓮経一部、然・堅の二上人に付嘱して呈似いたします。惟だ冀わくば日日に常に讀み、讀み已って能く誦し、誦し已って能く持せんことを。則ち経中に謂う所の諸佛出世一大事因縁は是れ他法に非ず、現前刹那の一念を出でず。請か快かに精彩を添えられんことを。若し匣にいれて之を藏し、反て自ら「白底は是れ紙、墨底は是れ墨、何ぞ勞勞と誦せん爲、寂然の愈爲るに如ぶ莫し」と以謂ば、此れ乃ち小乘なり、所謂る「俗には文字有るも、眞には文字無し」「吾れ聞けり、解脱の中、言説有る無し」にして、究意圓頓の妙旨に非ず。曹溪云わずや、「經に何の過か有らん、豈に汝が念ずるを障げんや」と、從義師云く、「禪和は諸家の語録を貪り看むこと少なからざるに、何ぞ佛の語録を看まざるや、佛の語録とは十二部經是れなり」と、智者の觀心誦經法に云く、「三世諸仏は此れ從り生ぜざるは無し」と。五祖亦た云く、「文字は是れ法身の氣命にして、若し讀誦して通利すれば是れ圓家の数息停心なり」と。

国師は世俗にとどまるか出世するか、ぐずぐずと決心しかねていたとき、書写していた金字蓮経に、「諸仏世尊、唯以一大事因縁故、出現於世」「正直捨方便、但説無上道」と説かれているのを見たのが、出家する決定的な契機となり、浮図氏に従って妙経(即ち法華経)を誦し妙行を修する決心をするが、この初心の一念は晩年まで変わることなく一貫していたのである。「答閔昊書」に「現前する妄念こそ即ち是れ一大事なり、豈に此の外に別に求むる道理有らん

や」と言うが、日々に常に蓮経を読誦し受持する現前刹那の一念こそが諸仏出世一大事因縁であり、それによって妄念が転じて極聖の一念に同じていく。そのことが円頓の妙行なのである。そしてその信の論理的根拠として『智者大師観心誦経法』にいう「三世の諸仏は念経正観から生まれないものはない」、及び天台五祖灌頂の句、「文字は法身の性命であり、読誦し精通すれば、円家の数息停心である」を挙げる。更に蓮経を読誦するより寂然たる方がよいと思うのは小乗であり、『法華文句』にいう「且く漸教に依りて分別し、仏は“俗には文字有るも、真には文字無し”を明かす」や、『法華玄義』にいう「身子(舎利弗)云く、吾れ聞けり、解脱の中に言説有ること無し」を引いて究意円頓の旨ではないと言うのは、「不立文字、教外別伝」の達磨禅の人でないことは明らかである。国師の禅は天台禅である。更に言えば、蓮経の読誦通利が円家の数息停心(禅)に他ならないのであるから、蓮経による誦経禅だといえよう。「蓮経法度疏」に「禅時誦、誦時禅」と言い、「為主上救病疏」に「光護法門、若誦若禅」と言うのは、このような誦経禅に他ならない。

国師は中国禅宗の諸文献を読み、その言葉を自らの文章の中にうまく取り入れており、また知訥に始まる修禅社の看話禅も知っていた。しかし国師の仏法の本質はそこにはなく、蓮経による誦経禅にあった。誦経通利することが禅であり、日々の受持読誦によって現前する刹那の一念こそが諸仏出世一大事因縁なのであり、この他に別法はないのである。そして会三帰一の法華経こそが、三韓を統一した聖祖(高麗太祖)以来の我国に最も縁の深い仏法であり、その受持読誦書写による機の因縁によって仏の感応を導き、国家の護持が成就し保たれるという因果歴然不昧を説く。

国師が出家した一二二八年の三年後、一二三一年に第一次の蒙古侵略があり、顕宗(一〇一〇~三一)の時代に完成した大蔵経は翌年の侵略によって灰尽に帰し、江華島への遷都が敢行され、蒙古との長い苦しい抗戦が始まる。この時代は崔氏武臣政権の時代(一一九六―一二五八)と呼ばれ、崔氏は蒙古に屈伏することなく徹底抗戦を続ける。しか

し崔氏の抗戦策に対する不満が次第に高まり、一二五八年、崔氏政権が倒れ、翌年には太子倎が蒙古に派遣され、忽必烈（ふびらい）の寛大な処遇によって講和が成立し、一二六〇年、帰国した太子は即位して元宗となった。しかし国内では依然として抗戦派と講和派の争いが続く。一二七〇年、王室は旧都に復すが、あくまで蒙古への抗戦を主張する江華島の三別抄軍は反乱を起して別政権を立て、江華島を離れて南方の珍島に移り、蒙古・高麗政府軍と戦うが、一二七一年五月に陥落し、耽羅（済州島）に拠点を移すが、一二七三年四月に鎮圧される。ここに抗戦派は滅び、一応の平和が保たれるが、元朝の属国となり、元の日本遠征のための協力と負担を強いられることが一二九四年の忽必烈（世祖）の死まで続く。

韓国仏教は護国仏教であるといわれるが、このような国の難患に当っては、とりわけ護国的要素が求められたであろう。中島志郎「高麗時代の禅宗史研究―崔氏武臣政権下の教宗と禅宗の動向を中心に―」[37]によれば、崔氏武臣政権の時代、旧勢力（文臣）に結びついていた王都の仏教は新勢力の武臣と角逐を生じて反乱を操り返し、崔忠献の粛清を受けるが、一方では五百禅宇を開創した高麗太祖の帰依を受けた禅宗即ち教外別伝の九山禅門が崔氏と結びついて復興し、禅教両宗に批判的な立場を取る知訥の修禅社は宗密の頓悟漸修説を受け入れ、華厳と禅を統合した教禅双修・定慧双修の思想を立て、最新の宋朝仏教である大慧の看話禅を修道論に取り入れて教禅一致の立場をもって台頭し、教宗は五冠山霊通寺を中心にして覚訓の『海東高僧伝』が一二一五年に成り、禅宗（九山禅門）に対抗する華厳宗に代表される旧勢力たる教宗の巻き返しがあり、「要するに図式的には、教外別伝派の禅宗と華厳を中心とする教宗と、その両者に独自の立場を取った知訥及び修禅社の運動という、性格の異なる三者の存在を想定でき」、崔忠献の時代、護国の覇を競って海東仏法の正傍を争った禅・教は、崔怡の時代（一二一九～四九）には仏教界を統合し、「禅教を併せて蒙古への抵抗に参画させようという」政策的課題があり、仏教界を統合する要（かなめ）に修禅社を配し、禅・教を両翼にして鎮護国家の仏法を形成していったと論じられている。

では国難に際してこの三者（教宗・禅宗・修禅社）は具体的にはどのような方法で護国に当ったのであろうか。教宗では焼失した大蔵経にかわる再彫大蔵経の刊行事業がそれに当り、禅宗では三年に一度行われたという談禅法会がそれに当ろう。修禅社はどうであろう。『宗門円相宗』を編した志謙が崔忠献の敬信を得たことから、崔怡は志謙のもとで出家する。父忠献が没した後、その家督を継いだ崔怡は二子を修禅者第二世の慧諶（一一七八―一二三四）の下で出家させ、修禅社との結びつきを強めていく。そして、高宗三二年（一二四五）、江華島に禅源社を開創し、修禅社第三世清真国師夢如（？―一二五二）の弟子である混元（一一九一―一二七一）を請じて主盟させ、禅源社主たらしめる。混元が夢如の後を承けて曹溪山に住すると、混元の弟子の天英（一二一五―八六）が社主を継ぎ、混元が曹溪山を退休するとともに天英が曹溪山に入る[38]。その間、およそ十二年、修禅社の人脈が禅源社主となっていた。先の中島論文が、禅源社に入った修禅社を要（かなめ）として禅と教を両翼に鎮護国家の仏教を形成したと論ずるのは、具体的にこのことである。

禅宗の談禅法会は、恐らくは禅源社の法会に解消し、また再彫大蔵経の刊行事業も高宗三八年（一二五一）に一応の完成を見る。そして再彫事業や禅源社を支えた崔氏政権は、一二五八年に倒れる。これまでの仏教による鎮護国家の基本が崩れ去ったと見てよいだろう。そのような情況下、注目を集めて登場してきたのが白蓮社第四世真静国師の、蓮経の受持読誦による護国仏教であった。一二六六年ごろより李蔵用・金坵・金禄延・郭汝弼・柳璥・鄭興等の多くの貴顕官僚が献詩していることは、このことを物語っていよう。

修禅社が禅の側から教禅一致を目指す立場をとるのに対して、白蓮社は天台蓮経の側から教禅一致を目指す立場にあったといえよう。そのような白蓮社の真静国師が、馬祖以後の唐代禅を受けて展開した高麗の禅を最高のものとする立場をとる『禅門宝蔵録』を編集する理由は見当たらない。

第三節、通奥真静大禅師

崔氏政権と結びつき江華島禅源社を基盤にして高麗仏教の中心に位置していた修禅社は、崔氏が倒れるとともに漸次後退し、高麗太祖以来の禅宗の体質を受けつぐ曹渓宗迦智山派に属する一然（一二〇六―一二八九）が台頭し、忠烈王十年（一二八四）、「九山門の都会（しゅうかい）を再闢し、叢林の盛、近古未だ曽て有らず」[39]という情況に到った。恐らくは『禅門宝蔵録』の撰者は、こうした九山門の法系につらなる人に違いなかろう。

蔡尚植氏は一然の法嗣である混丘（一二五一―一三二二）[40]こそ、『禅門宝蔵録』の撰者であるという[41]。一二九五年に立石された「麟角寺普覚国尊静照塔碑文」（以下「一然碑」と称す）に、一然の行状をしたためて上聞した「雲門寺住持大禅師清珍」と立石者として「内願堂兼住持通奥真静大禅師清珍」の名が見える。一方、混丘の碑である「瑩源寺宝鑑国師如応塔碑」[42]に、混丘の旧名を清玢とすることから、「清珍」の「珍」は「玢」を誤ったものであるとし、行状を上聞した人物及び立石した人物は同一人であり、混丘に他ならず、内願堂真静大禅師とあることから、『禅門宝蔵録』の撰者も混丘その人であるとする。

「一然碑」は今日ではその断碑が存するのみであるが、金慧月の筆写本が月精寺に所蔵されていて、その全文を見ることができ、『朝鮮金石総覧』上（四六九頁以下）、李能和『朝鮮仏教通史』下編（三五八頁以下）に掲載されている。『総覧』では「清珍」と判読し、『通史』では「法珍」と判読されている。李智冠『校勘訳註歴代高僧碑文（高麗篇4）』所収の「一然碑」は、金慧月の筆者本そのものを底本としたものである。そこでは行状を上聞した者の方の名は「清玢」とされ、立石者の方は「清珍」であるが、「珍」は「玢」を誤ったものであると校記し、蔡尚植氏の説に同意している。一方、裏面に刻される碑陰記は近年、残されていた諸資料をもとにその全文の復刻が試みられている。そこに「宝鏡寺住持通奥真静大禅師山立述」とあることより、碑陰記は山立が述べたものであり、しかもこの人も通奥真静大師の称号を持

つ。その碑陰記[43]にいう、

新天子祚に即きし元年乙未夏四月初、麟角長老、余に遇いて曰く、「先師入滅し、忽忽に六七年なり。國朝の恩禮渝らず、重臣に命じて碑を撰せしめ、諸を琬琰に勒み、本院に樹つ。仍りて門徒に勅すらく、『替代の相承もて、以て香祀に奉ずれば、飾終の禮、畢んぬ』と。公と徒を碑の陰に列し、後世に知らしむれば、絡誦・副墨、元より由緒有らん。子能く吾輩の爲に之を記すや」。余、之に頷ずいて曰く、「善い、國尊の世に在りし時、山立は因縁差奪するを以て、未だ門徒の列に詣るを獲ず、常に以て恨みと爲す。…」

麟角長老とは、一然が遷化した六・七年前には雲門寺に住して師の行状を上聞し、碑が麟角寺に立石された頃にはその住持であった内願堂兼住持通奥真静大禪師清玢のことであると考えて間違いなかろう。また山立は一然の門徒ではなかった。とすれば、通奥真静大師という同じ称号を持つけれども、山立と清玢は全く別人である。既にこのことは金相鉉氏によって論じられ、李智冠氏はそれに賛成されている。筆者も同意である。

ところで、通奥真静大禪師については、もう一つ資料がある。修禪社第六世となった冲止(一二二六―一二九二)の「寄真静通奥大禪書[44]」がそれである。崔氏政権が倒れて以後、漸に中央の仏教より後退していった修禪社の状況が窺われて興味深いので、以下に全文を紹介する。

真静通奥に寄せる書

某白す、即ち辰、凉風肇めて至る。緬に惟う、法体起居安隠にして病少く悩少きことを。山野は徳を荷ること素有りて、今に迨るまで恙無く眠食す。丈下は雄深儁偉の質、宏敏博洽の才を以て、聖明に遭遇し、禁闥に翺翔し、日に翰墨の歡に陪い、以て文明の化を助く。間に法雨を以て、潛かに帝業を潤す。實に千載一時の際會な

り。安老の見は唐高璉公の見より重きと雖も、宋仁に幸せらるるは亦た以て加うる無し。[45] 遂に寵は高堂に及び、九十歳の鶴髪の親をして、一旦に四品に驟せ登らしむ。詔を承けて闕に赴くに、主上は特に中使を遣わし、中路に勞問し、仍お鞓帯を賜い、以て褒美の意を示す。此れ千万古に未だ曽て有らざるの盛事なり。

山野は童稚の時より、知の幸を辱くす。固に淺淺の問に在らず。之を聞きて失喜し、其の慶躍の至は、尋常の人に同じならず。然れども性は本と疎懶にして、而も又た南荒窮谷の中に避處し、凡そ人と書問往還し、但だ之に相い和すのみにして、敢て先倡せざるなり。以故に未だ嘗て一書を修して丈下に達せず、竟に不謹に墮す。是れ亦た納僧家の本分、想ば必ずしも此を以て罪責せざらんことを。

竊かに聞く、唐武の沙汰の際、佛法は幾於ど地を掃わんとするに、宣宗祚に即き、釋教を重興す。天下に再び法輪を轉ぜし者は、實に鹽官安公にして、先に主と知を結び、然るを致す所なり。噫、匡烈公(崔怡の謚)の捐館りしより、吾が道は漸に微え、近世以來、命は懸絲の如し。此れ凡そ有識者の共に胸を槌って歎惜す所の者なり。今、丈下は朝夕に龍顔に密邇き、親しく顧問を承く。其れ主上の知るに遇うこと、鹽官に萬萬倍す。則ち吾が道の復興は、立ちて待つべし。伏して望むらくは、丈下の深く之を昭かにし、深く之を思い、努力勉旃せられんことを。常に宗風を再振するを以て念と爲さば、則ち吾が道幸甚、吾が道幸甚。

山野は近ごろ曹溪の籌室に詣り、伏して宣賜の御製御書の寶簇を覩るに、其の句格の美・筆法の妙は、固に擬議すべからず。山野は仰ぎて之を觀、目眩み心醉い、身は雲霄の上に躍り、目は日月の光を覩るが若し。緘默するに忍びず、謹んで御製に依りて強いて四絶を成ぜり。齋莊薫浴して遙かに丈下に呈す。伏して望むらくは、丈下には蕪拙を以て棄つるを爲すこと無く、宵旰の隙を伺い、天陛に達し、以て天顔の一解に資すれば、則ち實に山野の平生の幸なり。

伏暑は未だ退かず。惟うらくは法の爲に珍嗇し、以て遐祷に副わんことを。不宣。惶恐頓首。

この手紙は、寵を得て、詔もて京師に上り、主上に陪侍するようになった旧友へ宛てたものである。書中に「山野近詣曹渓籌室」とあるから、修禅社第五世天英が順世し、大衆の推挙により曹渓山の法席を継いだ一二八六年四月以後、そんなに隔たらぬ時期のものであろう。修禅社最大の檀越であった匡烈公(崔怡、一二四九年卒)が亡くなってから漸次に衰微し、近ごろではその命脈が危うくなったと慨嘆し、未曽有の寵を得て主上に陪侍する旧友に「吾が道」の復興を期待する。そして、籌室にあった御製の詩に和韻して四絶を作ったので、それを主上に見せて欲しいと頼んでいる。「吾が道」とは修禅社を指すのか、もっと広く禅宗を指すのかで理解の仕方が変ってくる。一二八四年、一然によって九山門の都会(しゅうかい)が再開され、叢林の盛大さは近古に未曽有であったというのであるから、冲止の「吾が道」とは修禅社のことと考えてよいだろう。とすれば冲止が真静通奥大禅と宛名する僧は、修禅社に連なる者であり、冲止が童稚のころよりの旧識であった。

「一然碑」及びその「碑陰記」にいう二人の通奥真静大禅師のうち、どちらがこの僧に当る可能性があるかといえば、山立の方である。清玢は一然の法嗣であって修禅社の僧ではない。また清玢が混丘であるなら、混丘は忠憲王(高宗)三十八年辛亥(一二五一)の生まれであるから、冲止が童稚のころよりの旧識になれるわけがない。山立のことは不詳だが、一然の弟子の列に連ならないのだから、修禅社系の僧であった可能性がある。

大禅師は高麗の禅宗系の僧の階級を示すものだが、「通奥真静」或は「真静通奥」とは一体何なのだろうか。白蓮社の真静、『宝蔵録』撰者の天頂、そして清玢、山立、更には冲止の手紙の差し出し人に当る僧、更には至元十六年(一二七九)普幻撰『首楞厳経環解刪補記』の跋文を書いた広明寺伝法住開天真静大禅師祖[46]がいる。これらを真静という共通項だけで全て同一人だと結論するのは乱暴すぎよう。『宝蔵録』の天頂の序は一二九三年、「一然碑」は一二九五年、ほぼ同時期に正式な署名が天頂から清玢に簡単に変わってしまうものなのだろうか。清玢が混丘の旧名であり、一二九五年にはこの名であったのなら、二年前のときにも清玢であったはずだ。なぜなら一然の順世した六・七年

前にも清玢であったのだから。混丘は曹渓宗に属し、思想的には『宝蔵録』に近い人であったろうが、真静という共通項だけの根拠によって『宝蔵録』の撰者天頂と同一人だと結論するわけにはいかない。そもそも「通奥真静」とは固有名詞というよりは称号であったのではないだろうか。それなら同時期に同じ称号を持った人が何人かいてもおかしくはない。

第四節、まとめ

白蓮社第四世真静国師が天頂の名であるとするのは、『万徳寺志』から始まる。『万徳寺志』は、『宝蔵録』の真静大禅師天頂とは白蓮社四世真静国師その人であると考えたからである。そう考えた根拠は、『西域中華海東仏祖源流』に、『海東伝弘録』の撰者である真静国師の諱を天順としていることにあったと思われる。天順は天頂の誤刻と考えたのであろう。しかし誤刻であるかどうかは確かなことではない。なぜなら『海東仏祖源流』が『宝蔵録』の名を出さぬということは、『宝蔵録』の真静大禅師天頂のことを知らずに諱を天順としたものであり、何か他に根拠があったのではないかと思われるからである。『海東仏祖源流』が使用した資料を時代を遡って探さなければならないが、今の筆者の手に負えるものではない。韓国人仏教研究者に任せる他はない。より古い資料によって確かめられるまで、白蓮社真静国師の名を天頂として使ってはならないだろう。

白蓮社四世真静国師は『宝蔵録』の撰者真静大禅師天頂ではない。『湖山録』の作品及びその周辺資料の検討により白蓮社真静国師は一二七七年以前に示寂していたと考えられ、高翊晋氏の説に賛同する。また白蓮社真静国師は、三韓を統合した高麗の風土には、会三帰一の法華経、三観一心の天台宗こそが最もふさわしい仏教であり、蓮経の書写受持読誦の善縁を積むことによって仏の感応を得、除災護国が実現すると信じ、「仏の語録とは十二部経」(従義師語)であり、「念経正観より三世諸仏は生まれる」(『智者大師観心誦経法』)、「読誦通利することが円頓の数息停心であ

る」（灌頂『法華玄義』）と説かれていることを根拠に、不立文字・教外別伝の達磨の禅宗は究竟円頓の旨ではないとする。蓮経の読誦こそがこの人の禅であった。まさに思想の上からいっても、『宝蔵録』の撰者とは見なすことはできない。

『宝蔵録』が撰述された同時期、真静大禅師と称された僧には、天頂、清玢、山立、『楞厳環解刪補記』の跋を書いた師祖、そして冲止が書を寄せた僧がいた。これらは同一人であるとは見なせない。「通奥真静大禅師」或は「真静通奥大禅師」とは固有名詞ではなく、一種の称号と見なせないか。さすれば何人もの真静大禅師が同時に存在してもおかしくはない。また正式な署名が六、七年の間に清玢から天頂へ、そして天頂から清玢へ変わるとは考えにくい。清玢こと混丘が、天頂その人に他ならないとする説には賛同できない。

〔註〕

①『仏祖源流』後跋

猗歟、盛んなる哉、釋教の興る。西方に始まり、萬邦を普ねく照らす。其の來たるや彌しく且つ久し。蓋し佛の道爲る、大を語れども外無く、小を語れども内無し。巍巍蕩蕩として萬有を包含す。所以に累劫を經るも勝縁を植え、千変を歴るも生滅せざる者なり。淺見薄識を以て、豈に敢て喙を其の間に容れんや。而れども竊かに歎惜する所の者有り。何となれば則ち瀾を觀れども其の源を知らず、枝を察すれども其の根を知らず、可なりや。傳道の統記・俗家の世譜は良に以て是れなり。我が禪宗を顧るに、上は現劫より以還、拘留佛は莊嚴劫第千尊の毘舍浮の心印を受け、迦葉に展至す。迦葉の高足の眞歸は、叢木房中に之を釋迦に授け、四七・二三、南嶽・臨濟に至る。中間の大手名曹は若干爲らず、甚だ心法を受授す。詳かには道源の傳燈・念常の通載・達摩の別録に載す、歴歴考うべし。我が東するに至って、一切の祖師の傳法淵源は、達摩に上接すれども尚お顕刻する無く、末學・後禪のものをして某祖は某師の祖爲るや、某師は某祖の孫爲るやを知らざらしむ。茲れ豈に吾家の一大欠事にして竊かに歎惜する所有る者に非ざらんや。肆に昔、懶翁の法嗣なる無學祖師は深く悶然たるを用て、傳鉢の源流次第を刊出し、諸簇子に付して以て之を傳う。而れども事は國初に在り。故に佛祖より肇まり、指空・懶翁に止まる。其の後、我が月渚大師は簇図を重刊し、始めて本朝に及ぶ。而れども太古より起して、玩虚・松雲に至るのみ。玩虚・松雲の外、名師大徳の遺漏して傳わらざる者は多し、歎ずるに勝う可けんや。采永は月渚の裔なるを以て、未だ嘗て慨然かずんばあらず。是に於て先志を繼述せんと欲す。壬午（一七六二）の春より八路を周遊し、諸派の記すべき文を収集し、鳩聚して鋟梓せんとして、如干かの財、積年に經紀し、以て今夏に至る。諸山の碩徳と全州府終南松廣に會し、博く公議を採り、諸の傳燈を考じて其の序次を定む。其の間に祖師の泯沒すべからずして嗣の繼ぐべき無き者は、則ち散聖を以て載録して卷端に附し、一部を合成す。冊子を佛祖源流と曰う。始めて克く刊行するは斯れ乃ち法家の盛擧なり。噫、曽て未だ前むに遑あらざる所の者、幸にして今日に成るを得たるは、其れ亦た時有りて然らんか。茲に千有余袂を印し、諸宗に播送し、不朽の傳を作さしめんとするは、極めて僭越にして、逃罪する所無きを知る。然れども後を牖き遠きに傳えるの道、亦た未だ必ずしも小補無きにあらずと爾云う。

乾隆二十九年甲申孟秋望日　月渚の五世孫　錦波門人の獅巖采永謹んで識す。（『韓国仏教全書』一〇―二三四）

②『奎章閣図書韓国本総目録』（東亜文化研究所、一九六五）五三一頁。
③『奎章閣図書韓国本総目録』では崇禎三癸酉に括弧して一七五三としており、里道徳雄「『西域中華海東仏祖源流』僧名索引稿―朝鮮仏教僧名集成Ⅵ―」（『東洋学研究』第十四号、昭和五五年）の解題でもその説を踏襲して論を進めている。
④朝鮮総督府『朝鮮図書解題』（名著刊行会、昭和四四年）四一四頁。
⑤李能和『朝鮮仏教通史』下編五〇九頁。『韓国仏教全書』第七冊に翻刻されている。
⑥『奎章閣図書韓国本総目録』五三一頁、及び『蔵書閣図書韓国版総目録―附補遺篇―』（韓国精神文化研究院、一九八四）五七六頁。
⑦菅野銀八「万徳寺志に就て」（『朝鮮』一六〇、昭和三年）。許興植「万徳寺志の編纂とその価値」（韓国寺志叢書『万徳寺志』所収〈亜細亜文化社、一九七七〉）。
⑧仏教史学会編『高麗後期仏教展開史研究』（民族社、一九八六）に収録される。
⑨仏教史学会論『高麗中後期仏教史論』（民族社、一九八六）に収録される。
⑩許興植「真静国師の生涯と時代認識」（『東方学志』第三五集、一九八三）。後に『高麗後期仏教展開史研究』に収録される。
⑪李永子「天頂の湖山録」（『韓国仏教学』第四集、一九七九）。後に『高麗後期仏教展開史研究』、李永子著『韓国天台思想の展開』（民族社、一九八八）に採録される。
⑫松広寺本の影印は『大苞寺志』（韓国寺志叢書第六輯、亜細亜文化社、一九八〇年）の附録三、及び李永子著『韓国天台思想の展開』（民族社、一九八八年）の附録に掲載されている。また翻刻本は『韓国仏教全書』第六冊（東国大学出版部、一九八四年）、及び『高麗後期仏教展開史研究』（民族社、一九八六年）の付録三に掲載がある。
⑬許興植著『真静国師と湖山録』（民族社、一九九五年）の付録に影印があり、本文には一枝庵本及び松広寺本・万徳寺志によって補完された『湖山録』の翻刻と韓国語訳がある。但し影印本は十一丁裏～十八丁表までが落丁し、二十一丁裏～二十八丁表までが重複するという欠陥を持つ。
⑭『万徳寺志』五五頁。「眞静國老は儒林の巨魁にして深く祖道に入るを以て、故に發して詩文を爲る。天然に雅頌の風有り。其の歸す所は乃ち勸善誡惡にして、無生の域に驅入せんと欲すのみ。世の無鹽（しこめ）に畫（けしょう）し、嫫母を飾り、一時の譽を規取する者の若きに非ず。夫れ醍醐

は飲めども厭きず、珠玉は玩すれども足らざるが比し。門人の釋教都摠攝の靜慧圓照大禪師而安、既に之を録して集を成ず。又た錢を出して、售工鋟梓し、之を傳えて朽ちざらしむ。実に能く蠱を幹どって纘承ぐと謂うべし。大德十一年十月日、王師佛日普照淨慧妙圓眞鑑大禪師丁午跋す」。

⑮許興植『真静国師と湖山録』一四二頁。

⑯許興植『真静国師と湖山録』一四一頁。

⑰『万德寺志』巻二、四三頁。

⑱許興植、前掲書及び論文。

李永子、前掲書。

高翊晋「白蓮社の思想と天頭の著述問題」（『仏教学報』第十六輯、東国大学仏教文化研究所、一九七九）。

⑲『万德寺志』巻二、四四頁。

⑳『韓国仏教全書』第六冊、五三九頁。「今有浮庵長老無寄、早投白蓮社第四世眞淨國師之嫡嗣釋教都僧統覺海圓明佛印靜照大禪師而安堂下、落髮披緇、法名雲默……時天歴三年庚午二月八日、萬德山白蓮社沙門豈跋」。

㉑「丙寅仲秋一日、謁平章慶源公、因語及宋學士王文公禹偁西湖蓮社詩、其起聯云、夢幻吾身是偶然、勞生四十又三年。時予適已過先師不惑之年而加數歳、惻然有感。因和成一篇、遙寄呈大尊宿丈下、以達鄙懷。且約他時問道、冀緑蘿煙月、無以予爲生客耳。弟子左正言知制誥林桂一上」。

㉒『万德寺志』巻二、四七頁。

㉓『法華霊験伝』の了円の序にいう。「法華靈驗傳有大唐朝藍谷沙門慧詳所撰弘贊傳十卷大宋朝四明沙門宗曉所撰現應録四卷、又有本朝眞淨國師所撰海東傳弘録四卷。今歴覽此三傳、抄録其中最爲奇特事、合成二卷、以勸發後來。兩卷合百七奇異。觀識沙門了圓録」（Z二三四―0775下）。

『法華霊験伝』には出典を『海東伝弘録』と明記するものが七話録されている。そのうち六話までが真浄国師が実際に見聞した同時代の霊験譚であり、巻下十六段の「深敬弁山人之精書」には「中統元年庚申也」と一二六〇年の年期がある。この他に出典の明記はないが、

『海東伝弘録』から採録したと思われるものに第十六段の「蓮華院之若読若説」「珎禽顕瑞」「亡妹告徴」があり、高麗における真浄国師と同時代の話である。

㉔答林正言桂一　并序。昔李少卿顥、隠迹象王山時、攀話之次、記得王元之白蓮結社詩次韻二三首、略敍山中消息、今已十七年矣。臘月二十日、奉閲所和王公四韻清詩、官年端合古人切有入社之志。非金門羽客常寓興於象外、則何能如是也。謹和成拙詩、遙賀萬一并敍鄙懐。答林正言桂一。

㉕「仙山島、在縣南海中。高麗正言李顥謫莞島、其叔父僧慧日、隨而訪之、仍入島創寺以居」。

「法華院、在莞島中。寺之洞有全石溪・天然台・象王峯」。

㉖「夏暑已來、伏唯丈室清勝、歆仰歆仰。僕與丈下別、今已二十二年、縁塵務纏縛、又再使絶域、未暇修問左右年時、猘犬吠主、聚居珍島、驅掠沿海州縣、其間無辜物故者幾何。久聞社内亦罹此難。仰惟丈年已高衰、憑何処避寇、今得心秀快然。然禪書音聞、丈下無恙。透脱喜慰。今珍賊重敗潰、國患小紓、更加作法、福利人天、爲法自愛。…」（『真静国師と湖山録』一七一頁）。

㉗旗田巍『朝鮮と日本人』（頚草書房、一九八三）、一五五～一五七頁。

㉘今の康津県に当る。『高麗史』巻五七長興府条、「耽津縣本百濟冬音縣、新羅景徳王改今名爲陽武郡領縣、高麗移屬靈岩後來屬、別号鼇山、有富仁島・恩波島・碧浪島・仙山島、又有莞島」（『高麗史』第二、二百五十八頁下、国書刊行会編）。

㉙開国祖師の道詵が創立した三巌寺（仙巌・雲巌・龍巌）の一つである龍巌寺に無畏丁午が入ったことによって重創が成ったことを記念して国統の門徒のたのみによって朴全之（一二四六―一三二一）が撰した。「庵居日月記」と共に無畏丁午の伝記の第一資料となるもの。「國統は妙齢にして僧選に試して上上科に捷かり、即ち身名の網を脱し、山に循って住庵して年有り。上は師の所行を聞き、大徳六年壬辰夏を以て、特に中使祗候金光軾を遣わし、師を月出山白雲庵に迎え、命じて願刹の妙蓮社に主たらしむ」と記し、以下経歴は次のようである。

・大徳十年丙午（一三〇六）白月朗空寂照無碍大禪師の号を賜う。

・大徳十一年（一三〇七）仏普照静慧妙円真鑑大禪師の法号を賜う。金蔵寺に移住。

・至大二年（一三〇九）国清寺に移る。

・至大三年（一三一〇）瑩原寺に移住。
・皇慶二年（一三一三）国統と為り、大天台宗師雙弘定慧光顕円宗無畏国統の法を賜う。（『高麗史』巻三四忠粛王癸丑十一月にいう、「王師の丁午を以て國統と爲す」）。
・延祐甲寅（一三一四）龍巌寺に移住。
・延祐五年（一三一八）龍巌寺重創成り、入院して七日間の落成法会を設く。
『仏祖源流』高麗祖師条では、『法華霊験伝』後跋や「水原万義寺祝上華厳法会衆目記」（『東文選』巻七八）にいうところの天台珍丘寺住持の大禅師混其と「妙蓮寺石池竈記」（『東文選』巻六九）にいう牧庵無畏禅師（即ち無畏丁午）を誤って混同して、「無畏國師。諱混其、字珎丘、号牧庵、姓趙氏、肅公徳裕伯父、圓妙十一世孫也」と言っていることは高翊晋前掲論文・蔡尚値「高麗後期天台宗と白蓮社結社」（『高麗後期佛教展開史研究』所収）に詳しい。

㉚註⑭を見よ。

㉛許興植『高麗仏教史研究』（一潮閣、一九八六）八八四頁。

㉜『東文選』巻八三。

㉝この故事は『宝林伝』巻四婆修盤頭章（『禅学叢書之五』七八頁上左）・摩拏羅章（『同』八一頁上右）、『祖堂集』巻二第二十一祖婆修盤頭尊者章（『禅学叢書之四』一―五）、『伝法正宗記』巻四（T五一―七三二b）に見える。

㉞天台智顗『法華経玄義』巻第六上（T三三―七四八b）よりの引用。他に永明延寿の『宗鏡録』巻六一（T四八―七六六b）・『万善同帰集』巻下（T四八―九八九c）に見える。

㉟禅における鼓腹の用例を挙げれば、「上堂。今朝三月十五、已得如膏之雨、農夫鼓腹歌謠、萬象森羅起舞。敢問大衆、農夫鼓腹理合如是、萬象森羅因甚麼起舞。還委悉麼。不見道、一家有好事、引得百家忙」（『大慧語録』巻六、T四七―八三四a）、「示衆曰、一大藏教是箇之字、祖師西來是右字、作麼生是正義。良久曰、天晴蓋却屋、趂閑打却禾、輸納王租了、鼓腹自高歌」（『禅林僧宝伝』巻十一洞山聰禅師、Z一三七―0486下）。

㊱『韓国仏教全書』第六冊、二一〇頁。「且先徳有言、禪是佛心、教是佛語。如來心口、必不相違。又曰、才力善逝、語心爲經。則凡東傳

根葉之教、非是他物、皆佛心也。如欲學佛乘爲佛子、捨茲何以哉。昔從義立訓曰、禪和輩貪看諸家語録不少、何不看佛語録耶。貧道不佞、早參祖域、粗究西來之旨、更發信誠、將温尋藏教資道業爲日課者、有年數矣。云々」。

㊲中島志郎「高麗時代の禅宗史研究—崔氏武臣権下の教宗と禅宗の動向を中心に—」（『青丘学術論叢』第十集、一九九七）。

㊳中島志郎、前掲論文参照。

㊴「麟角寺普覚国尊静照塔碑文」（『朝鮮金石総覧』上四七一頁、李智冠『歴代高僧碑文〈高麗篇4〉』一九三頁）。

㊵『朝鮮金石総覧』上六〇二頁以下に所収する「瑩源寺宝鑑国師妙応塔碑」によれば、「以忠憲王二十七年辛亥七月二十七日誕焉。…至理二年冬十月感疾、移錫于松林寺。…越三十日盥浴、…據床而逝。…報年七十三、僧夏六十三」とあるが、問違いが多い。「至理」は「至治」の誤まり、報年七十三から逆算するとその生誕は高宗（忠憲王）三十七年庚戌（一二五〇）に当る。しかし碑銘は「忠憲王二十七年辛亥」とする。二十七は三十七の誤りとしても、辛亥は一二五一年に当る。

㊶蔡尚植「普覚国尊一然に対する研究」（『韓国史研究』二六、一九七九）、後に『高麗中後期仏教史論』に収録、また蔡尚植『高麗後期仏教史研究』（一潮閣、一九九一）。

㊷註㊵の他に李能和『朝鮮仏教通史』巻下三六四頁。

㊸李智冠『歴代高僧碑文〈高麗篇4〉』（社団法人伽山仏教文化研究院、一九九一）二〇四頁、李智冠校勘修正補完本に依る。

㊹沖止『海東曹溪宓庵和尚雑著』（『韓国仏教全書』一一—三八二）。

㊺原文は「雖安老之重於唐高璉公之見、幸於宋仁亦無以加矣」、下敷となる話があると思われるが、解読できず。待考。

㊻『韓国仏教全書』六—四六八中。

〔付録〕1　訓註「答芸台亜監閔昊書」

答芸臺亞監閔昊書

正月日、靈興山普賢社安居苾蒭、謹修書、奉答芸臺亞監閔學士閣下。且羅漢不識赤鹽之問、以其偏證眞空、不博識内外典籍、蓋闕漚和之智。故佛弟子示詳一時、兼學方言名數外論。蓋欲逢儒説儒、對釋論釋、使問答如流見聞發心也。

芸台亜監の閔昊に答える書

正月日、霊興山普賢社に安居する苾蒭、謹んで書を修め、芸台亜監の閔学士閣下に奉答す。且れ羅漢は赤塩の問いを識らざるは、其れ真空を偏証し、内外の典籍を博識せざるを以てなり。蓋し漚和の智を闕く。故に仏弟子は示詳一時にして、兼ねて方言・名数・外論を学ぶ。蓋し儒に逢うては儒を説き、釈に対しては釈を論じ、問答流れるが如くして見聞発心せしめんと欲すればなり。

今閣下儒也、予釋也。實容儀不同、名分不等。然世尊有言、我遣三人化彼震旦。故李舟曰、釋迦生中國、設教如周孔、周孔生西方、設教如釋迦。李商隱亦曰、尼師老聃、聃師牟尼。稽首正覺吾師。吾師則何三教之異。故今略引三教之緒餘、具陳所出家之往因、并叙人世之虚幻不實、佛法之因果不昧、予豈好辯哉、惟閣下詳察焉。

今閣下は儒なり、予は釈なり。実に容儀同じからず、名分等しからず。然るに世尊言う有り、「我れ三人を遣わして彼の震旦を化せん」と。故に李舟曰く、「釈迦は中国に生まれ、教を設くること周孔の如く、周孔は西方

に生まれ、教を設くること釈迦の如し」と。李商隠亦た曰く、「〔仲〕尼は老聃を師とし、〔老〕聃は牟尼を師とす。正覚たる吾師に稽首す。吾師は則ち何ぞ三教之を異とせんや」と。故に今三教の緒余を略引し、出家する所の往因を具陳し、并びに人の世の虚幻不実、仏法の因果不昧を叙べんも、予豈に弁を好まんや、惟だ閣下詳察せられよ。

予自七八時、始事讀書、及予十有五、濫嘗虞夏商周之書、灝灝爾、噩噩爾、淖淖爾、至於風騷之作、屈宋班馬、王楊盧駱、甫白蘇黄、凡白(3)文章之體、切欲滑稽多識。蓋髣髴古人之胸中。國子也忽當栢直口尚乳年、始赴場廈廊(4)、春登士板、秋入辟雍。幸與閣下俱在東摩、、故出入不吾捨、語默不吾背、肩隨而接之。來書云、往昔同舍而語之、若同胎然。蓋實録耳。才隔(5)一年、擢(6)第春官、更勤所業、常以墨兵黄妳爲日用。

予七・八の時、始めて読書を事めてより、予十有五に及んで、虞・夏・商・周の書を濫嘗し、灝灝爾、噩噩爾、淖淖爾として〔国〕風・〔離〕騒の作、屈〔原〕・宋〔玉〕・班〔固〕・〔司〕馬〔遷〕・王〔勃〕・楊〔炯〕・盧〔照隣〕・駱〔賓王〕・〔杜〕甫・〔李〕白・蘇〔軾〕・黄〔庭堅〕に至る。凡白の文章の體は切に滑稽多識ならんと欲す。蓋し、髣髴として古人の胸中のごとし。国子や忽まち栢直口尚お乳の年に当って、始めて場⑩廈の廊に赴き、春に士⑪板に登り、秋に辟⑫雍に入る。幸にして閣下と俱に東⑬摩に在り。故より出入するに吾を捨てず、語黙吾に背かず、肩随して之を接す。来書に云う、「往昔同舎にして語り、同⑭胎然（？）の若し」と。蓋し実録のみ。才かに一年を隔てて、春官に擢第し、更に所業に勤め、常に墨⑮兵・黄妳を以て日用と為す。

忽一日猛省知非、以儒雅之身於佛法反。自傷嘆曰、自古業儒之士之心、出月脇作爲章句、其或駢(7)四儷六之乎者也。著成文集、誇耀於世、既是流蕩之心、綺飾之辭、厥罪不少、何益之有。且以三韓言之、著成家集、流行於

世、若凡數十家。始則文昌崔致遠、十二歸上國、十八占甲科、状頭五第、文章感動於中華、前後著成文集、凡五十七卷。近世金翰林克己、著一百三十五卷。及[8]自己已化於九泉、虚名獨流於四海、片無一得。何預於我哉。

忽ち一日猛省して非なるを知り、以えらく儒雅の身は仏法に於て反す、と。自ら傷嘆して曰く、「古自り儒を業とするの士の心は、月[15]脇を出して章句を作為し、其れ或は駢四儷六・之乎者也なり。著して文集を成じ、耀を世に誇るは、既に是れ流蕩の心にして、綺飾の辞は厥の罪少なからず、何の益か之れ有らん。且らく三韓を以て之れを言えば、家集を著成し、世に流行するは、凡そ数十家の若し。始めは則ち文[17]昌崔致遠、十二にして上国に帰し、十八にして甲科を占け、状頭すること五第、文章は中華に感動し、前後に文集を著成すること、凡そ五十七巻なり。近世には金[18]翰林克己は、一百三十五巻を著わす。自己已に九泉に化するに及んで、虚名のみ独り四海に流る、片も一得無し。何ぞ我に預らんや」と。

予[9]與竺卿樂聞竺典。彼則似乎先知我心。仍謂曰、聖典有之、比如磨一大石、作一小牛、用功既重所期甚輕、世間才學、精勤勞苦、亦復如是。予試聞斯語、恧然自失、更扣玄蹤、不知膝之前於席也。切欲出家學法、皇恩佛恩、一時報畢矣。由是私心不弭。

予は竺[19]卿に竺[20]典を聞かんことを楽う。彼は則ち我が心を先に知るが似し。仍りて謂いて曰く、「聖[21]典に之れ有り、一大石を磨して一小牛を作るが比如し、功を用ゆること既に重きも期する所は甚だ軽し、世間の才学の精勤労苦することも亦復た是の如し」と。予試みに斯の語を聞くや、恧然として自失し、更に玄蹤を扣かんとして、膝の席より前むを知らず。切に出家して法を学び、皇恩・仏恩、一時に報畢らんことを欲す。是れ由り私心弭まず。

密與伯父略以出家之事告之。彼即沮曰、善則善矣。然佛法在心、何必出家爲。不孝有三、無後爲大。汝其思

之。昔[10]三邦鼎沸、大祖龍興[11]、有臣曰申厭達者、佐大祖定大亂立[12]功、圖畫於麒麟壁上。自[13]是子生孫、孫又生子、雲之仍之、繼繼不絶。遠則羅王之外孫、近則聖[14]祖之後裔、皆起迹山東、接虎朝端。降及迺祖、蓬山撰史、栢署振綱、其文章清白、忠孝之大概。又迺父挺[15]挺有祖風〔先[16]祖察訪使奏褒一等、先人亦居一等〕。況子之外出亦鶏林宗室。至我大祖、封西原京主、自侍中能熙、至汝外祖、凡九代蟬聯圭[17]組、世爲顯著。又外祖之祖、起居注冲若、雖題名金牓、迹入玉堂。儒術之外、尚熙乎玄風、後航海入宋、盡傳秘要、逍遙乎紫府丹臺、欽[18]吸乎玄霜絳[19]雪。故令中國道家者流[20]、皆歎伏歛衽。及返國上疏[21]、置不死之福、庭撞洪鍾、啓玄鑰、日鑒生靈之耳目。故至今明天子登鳳樓頒鳳詔、則必稱冲若之子孫、欲世世不忘也。幸汝承祖宗之烈、弱冠登第、英聲籍籍。蓋專儒業而期仕宦乎。

密かに伯父に與って略まし出家の事を以て之を告ぐ。彼即ち沮みて曰く、「善きことは則ち善し。然れども仏法は心に在り、何ぞ必ずしも出家せんや。不[22]孝に三有り、後無きは大為り。汝其れ之れを思え。昔三邦鼎沸するや、太[23]祖龍興し、臣に申厭達と曰う者有り、太祖を佐けて大乱を定むに功を立て、畫を麒麟壁上に図かる。是れ自り子は孫を生み、孫又た子を生み、之れ[24]を雲し之を仍ね、継ぎ継ぎて絶えず。遠きは則ち羅[25]王の外孫、近きは則ち聖[26]祖の後裔、皆な迹を山東に起し、虎を朝端に接ぐ。降りて祖に迺るに及んで、蓬[27]山として史を撰し、栢[28]署として綱を振い、其の文章は清白にして、忠孝の大概なり。又た父に迺るまで挺挺として祖風有り〔先祖の察訪使、奏して褒らること一等、先人も亦た一等に居す〕。況んや子の外の出も亦た鶏林の宗室なるをや。我が太祖に至って、西原京の主に封じ、侍中自り能く熙り、汝の外祖に至るまで、凡そ九代蟬聯として圭組し、世に顕著為り。又た外祖の祖は、起居注の冲若にして、名を金牓に題すと雖も、迹は玉堂に入る。儒術の外、尚お玄風を熙かし、後に航海して宋に入り、秘要を尽く伝え、紫府・丹台に逍遥し、玄霜[29]・絳雪を歆吸う。故に中国の道家者流をして、皆な歎伏歛衽ならしむ。国に返るに及んで疏を上り、不死の福を置し、庭に洪鐘を撞き、玄鑰を

啓き、日に生霊の耳目を鑑る。故に今に至るまで明天子の鳳楼に登り鳳詔を頒くときは則ち必ず冲若の子孫を称し、世々に忘ぜざらしめんと欲す。幸にして汝は祖宗の烈を承け、弱冠にして登第し、英声籍籍たり。蓋し儒業を専らにして仕宦を期せ」と。

予具聞其説、退而心言、雖内外紫纓、甲乙紅牋〔先[22]人外出、甲科紅牌、家傳、吾及見之〕、已是鬼録、於我何有乎。況世間虚幻、無堅牢久遠之足恃。雖乾城之起滅、蝸國之戰爭、石火水泡、霜蕉風槿、不足爲喩。若我以有恨之生、塵出块入随世推移、則設使布衣享南面之樂、安肯從刹那之外樂、忘常住之内樂也哉。

予具さに其の説を聞き、退いて心に言う、「内外は紫纓、甲乙は紅牋す〔先人外に出でて甲科に紅牌す、家に伝わり、吾れ之れを見るに及べり〕」と雖も、已に是れ鬼録なり、我に於て何か有らん。況や世間は虚幻にして堅牢・久遠の恃むに足る無きをや。乾城の起滅、蝸[30]国の戰爭、石火・水泡、霜・蕉・風・槿なりと雖も、喩と為すに足らず。若し我れ恨有るの生を以て、塵出块入して世に随って推移せば、則ち設使い布衣にして南面の樂を享くるも、安ぞ刹那の外樂に従って、常住の内樂を忘ずるを肯わんや。

又今匈奴圖寇、連境擧兵、鯨鯢天歩、螻蟻人命。雖公卿朝士、皆欲全身遠害、況闒茸[24]無頼之人乎。若夫衆富之兒、生年不讀一字書、惟輕驕[25]游俠是事、徒以月杖星毬、金鞍玉勒、三三五五、翺翔乎十字街頭、罔朝昏額額南來北去、觀者如堵。惜也。吾與彼俱幻生於幻世、彼焉知將幻身乘幻馬馳幻路工幻技、幻人觀幻事、更於幻上幻復幻也。彼與彼但更相執、實一旦茫然、終被[26]閻羅[27]老子摧屈、便縱[28]有千種機籌、怎免伊搪揆。由是出見紛譁、增忉怛耳。或經過市鄽、見坐商行賈、只以半通泉貨皆[29]哆哆譁譁、罔爭市利。何異百千蚊蚋在一甕中、啾啾亂鳴。或屠兒魁膾惟事[30]刃、是恣酷殺他身、販養自口、腥羶遍體、黒業崢嶸。但顧目前之利、不思身後之殃。雖馬面牛頭、何以

加此。如是而一鬨[31]、闤闠間無立錐之地可閑、遑遑求利、區區徇財。但望饕餮之給、卒皆欺誑於他。彼貿此、此易彼、物與物更相輪迴、故日日常如此者。因[32]是古人有言曰、『君不見、夫[33]朝趨市者乎。明旦側肩爭門而入、及暮之治、過市朝者、掉臂而不顧、非好朝而惡暮、所期物亡其中。』噫、人不能轉物、物却能使人、以物物之有無、卜人人之閑忙。其貪生逐物、奈萬古千今例皆一受。如[34]是而都末中、所聞所見、可爲長大者。若我突涕冒泣、強作言曰、則眞名教場一罪人耳。安能欝欝久居此乎。

又た今、匈奴は冦を図り、連境に拳兵し、鯨鯢のごとく天歩し、螻蟻のごとき人命なり。公卿・朝士なりと雖も皆な全身害より遠ざからんと欲す、況や闕茸・無頼の人をや。夫れ衆富の兒の若きは、生年に一字の書を読まず、惟だ軽驕游侠をば是れ事とせば、徒らに月杖・星毬、金鞍・玉勒を以て、、三三五五、十字街頭に翺翔し、朝昏罔く額額くして南来北去し、観る者堵の如し。惜しい也。吾は彼と倶に幻世に幻生するも、彼は焉ぞ知らん、幻身を将て幻馬に乗り、幻路に馳せて幻枝を工にし、幻人の幻事を観、更に幻上に於て幻復た幻なるをや。彼と彼は但だ更に相い執らわれ、実に一旦茫然たれば、終に閻羅老子に摧屈され、便ち縱い千種の機籌有るとも、怎ぞ伊の搪挨を免れんや。是れ由り紛譁を出見（現）し、忉怛を増すのみ。或は市鄽を経過し、坐して商い行いて賈うを見るに、、只だ半[31]通泉貨を以て皆な哆哆譁譁、罔に市利を爭う。何ぞ百千の蚊蚋の一甕中に在りて、啾啾として乱鳴するに異ならんや。或は屠兒・魁膾は惟だ刃を事す、是れ恣に他身を酷殺し、販して自らの口を養い、腥羶が體に遍ねく、黒業崢嶸る。但だ目前の利を顧みて、身後の殃を思わず。馬面・牛頭と雖も、何ぞ以て此れを加えん。是の如くして一鬨せば、闤闠の間、立錐の地の閑なるべき無く、遑遑として利を求め、區區として財に徇う。但だ饕餮の給を望んで、卒に皆な他を欺誑く。彼は此に貿え、此は彼に易り、物と物、更相で輪迴す、故に日日常に此の如し。是れに因りて古[32]人言有りて曰く、『君見ずや、夫れ朝に市に趨る者を。明旦に肩

を側てて門に争って入るも、暮の治に及んで、市朝を過る者に臂を掉るえども顧みず。朝を好み暮を悪むに非ず、期す所の物、其の中に亡ければなり』と。噫、人は物を轉ずること能わずして、物却って能く人を使い、物物の有無を以て、人人の閑忙を卜す。其れ貪生じて物を逐う、万古千今、例して皆な一えに受くるを奈せん。是の如きは而れども都て末中にして、所聞所見、長大の者と為すべけんや。我れの若きは突涕冒泣し、強いて言を作して曰わば、則ちに真に教場の一罪人と名づく。安ぞ能く欝欝として久しく此に居らんや」。

幸我丹桂主人清河相國、恩重鑄顔、言吾與點。仍使予書金字蓮經、始見「諸佛世尊、唯以一大事因縁故、出現於世」、又云、「正直捨方便、但説無上道。」極生殷重而自慶曰、「昔舎衛三億家、全不聞三寶名字、靈山三千衆、亦不聞五時終卒。今我未知何生植何善根、當此後五百歳、獲聞如是眞正大法。豈非宿縁醞釀不泯歟。」自是世出世首鼠之心、一刀兩段、切欲從浮圖氏誦妙經修妙行、忿忿未暇辨嚴。

幸にして我が丹桂主人清河相国、恩重もて鑄顔せんとして言う、「吾れ、點に與せん」と。仍りて予をして金字蓮経を書せしむるに、始めて「諸仏世尊、唯だ一大事因縁を以ての故に世に出現したもう」を見る、又た云く、「正直に方便を捨て、但だ無上道を説くのみ」と。極めて殷重を生じて自ら慶びて曰く、「昔、舎衛の三億の家は、全て三宝の名字を聞かず、霊山の三千衆も亦た五時を聞かずして終に卒す。今我れ何の生にか何の善根を植えしやを未だ知らざるも、此の後の五百歳に当って、是の如きの真正なる大法を聞くを獲たり。豈に宿縁の醞釀の泯びざるに非ざらんや」と。是れより世か出世かの首鼠の心、一刀に両段し、切に浮図氏に従って妙経を誦し妙行を修せんと欲するも、忿忿しく未だ辨厳するに暇あらず。

幸得同志者二人、潛發啓行、於千里道途、艱險備嘗之矣。計月餘旬日始參、所謂萬徳山。地僻人稀、寂無來

往。但見雲岑烟島掩映乎蒼茫間[38]、脩竹清溪可遨可賞。唯尨眉老衲四五輩、出門笑迎。遂居稻田、傅[39]相譯述、水邊林下、長養聖胎。象[40]外壺中、揩磨道眼、始立普賢道場、弘揚開顯佛乘、力行前代之不行、使覺後人之不覺。以今十四年矣。其[41]間遊歴他方、自一花五葉、南能北秀、正傳旁傳、與夫華嚴起信唯識法相毘尼律宗大乘小乘頓説漸説、雖聰明不及於前時、尚勤耳壁之聞、聊免面牆之誚。心地不蓬、似無罣碍、眞箇自慶。

幸にして同志の者二人を得て、潛かに発して啓行し、千里の道途に於て艱險備さに之を嘗む。月余旬日を計えて始めて所謂る万徳山に参ず。地は僻にして人稀、寂として来往無し。但だ雲岑烟島の蒼茫の間に掩映し、脩竹清溪の遨べく賞すべきを見るのみ。唯だ尨眉の老衲四五輩、門に出て笑迎するのみ。遂に稲田に居し、訳述を傅相け、水辺林下に聖胎を長養す。象外の壺中に道眼を揩磨し、始めて普賢道場を立て、開顕の仏乘を弘く揚げ、力めて前代の不行を行じて、後人の不覚を覚せしめんとす。今を以て十四年なり。其の間に他方に遊歴し、一花五葉してより南能北秀の正伝旁伝、夫れ華厳・起信・唯識・法相・毘尼律宗・大乘・小乘・頓説・漸説と、聡明は前時に及ばずと雖も、尚お耳壁の聞に勤め、聊か面牆の誚を免る。心地蓬れず、罣礙無きに似たるは、真箇に自慶たり。

既卜地於江之南、煙霞之棲息[42]、岩澗之幽隱、遠不與人間世交、略無孰何之問。近者謬承知臺檀越之請、因風而[43]來、逢場作戯、反愧無似之人、未能專精於一大事、唯蝗蠹桂玉耳。

既に地を江の南に卜し、煙霞の棲息、岩澗の幽隱は遠くして人間の世と交わらず、略孰何の問も無し。近者謬って知[44]台の檀越の請を承くるに、風に因りて来たりて、場[41]に逢うて戯を作し、反[42]って愧ずるに似る無きの人は未だ一大事を専精すること能わず、唯だ蝗[43]蠹の桂玉のみ。

況今秘監學士、不忘鬢舍昔年之同風、又感知臺[44]今日之願海、特修尺五之書、遠慰山谷、并送僧伽梨禦臘衣各一領、水沈一封、蠟燭二枚、以將厚意支持[45]。失措感愧深深。而書中特以古人鼓腹退兵之事。及之似警山僧、更勤香火、奉福國家、使粒食之民粲也晏也。有以見閣下用心、能内崇佛教而外拯[46]民災也。

況に今秘監学士、鬢舍の昔年の同風を忘れず、又た知台の今日の願海に感じ、特に尺五の之書を修して、遠く山谷を慰め、并びに僧伽梨・禦臘衣各一領、水沈一封、蠟燭二枚を送られ、以て将に意を厚くして支持す。失措し感愧すること深くして深し。而して書中特に古人の鼓腹退兵の事を以てす。之に及んで山僧を警しめ、更に香火に勤め、福を国家に奉じ、粒食の民をして粲せしめ晏んぜしめんとするに似たり。以て閣下の用心を見るに能く内に仏教を崇び、外に民災を拯う有り。

然昔者二十二祖摩拏羅尊者、當隣兵之釁冦、乃鼓腹曰、「我國晏然、久來無事」、果然自追。此是一段奇特事、豈可思議。然亦不知爲復大用現前、爲復時合縁會。去此二途、請君如何得解。又如唐之鄧隱峰、元和年中言遊五臺、路出淮西、屬呉元濟阻兵、違拒王命。峰曰、「我欲解其兵災」。乃擲錫空中、飛身而去。兩軍戰士、各觀神異、不覺抽戈匣刃矣。此等事迹、又如何商量。且大用難測。或時差縁異、則雖聖人、亦未[47]如之何[48]。故云、「因果不昧」。種麻得麻、種苧得苧。天網恢恢、踈而不漏。若撥無因果、如採芙蓉於木末、搴薜蘿於水中、此乃波旬之見、非西聖一路涅槃門也。故佛法中須辨因果歴然不昧。且璃喉大覺、究竟圓滿、尚示金鏘馬麥、乞食空鉢、寒風索衣、調達推山、旃遮謗路。此等因縁、可爲明鑑。

然るに昔者二十二祖摩拏羅尊者、隣[44]兵の釁冦に当って、乃ち鼓腹して曰く、「我国晏然、久来無事」と。果然として自ら追う。此れは是れ一段の奇特事、豈に思議すべけんや。然れば亦た為復た大用現前なるか、為復た時

に縁会に合するやを知らず。此の二途を去って、請う、君は如何が解すを得ん。又た唐[45]の鄧隠峰の如き、元和年中言に五台に遊ばんとして、路を淮西に出ず。属たま呉元済、兵を阻み、王命に違き拒む。峰曰く、「我れ其の兵災を解かんと欲す」。乃ち錫を空中に擲ち、身を飛ばして去る。両軍の戦士、各の神異を観て、覚えず戈を抽き刃を匣にす。此れ等の事迹、又た如何が商量せん。且て大用は測り難し。或し時差い縁異なれば、聖人なりと則雖も、亦た未だ之を如何ともするなし。故に云う、「因果不昧」と。麻を種えれば麻を得、芋を種えれば芋を得。天[46]恢恢として疎にして漏らさず。若し因果を撥無して、如し芙蓉を木末に採らんとし、薜・蘿を水中に寨（？）せんとせば、此れ乃ち波旬の見にして、西聖の一[47]路涅槃門に非ず。故に仏法中須らく因果歴然として不昧なるを弁ずべし。且て璃喉（？）大覚、究竟円満ですら尚お金鏘・馬麦、乞食空鉢、寒風索衣、調達推山、旃遮謗路を示す。此れ等の因縁、明鑑と為すべし。

又瑠璃王放醉象、踏殺五百釋種。是時大衆、皆懐憂悩、無逃避處。唯我世尊、光顔益現、熙怡微笑。阿難多聞、已證[49]聖果、尚昧醉象之因[50]。況諸凡位、豈能渙然氷釋。又目連欲免斯難、請以鐵爲城、世尊勿使城之。蓋由業報、不關佛而關衆生耳。誠知如此、則有多疑詰、灼然可判。夫道徳經曰、「兵者凶器也、聖人不得已而用之」。黄帝之蚩尤、舜帝之有苗、降及三代已來、無代無之、自佛法未興之前、姑且置之。

又た瑠[50]璃王、醉象を放って、五百の釈種を踏殺す。是の時、大衆皆な憂悩を懐くも、逃避の処無し。唯だ我が世尊のみ光顔益ます現われ、熙怡として微笑す。阿難は多聞にして已に聖果を証すも、尚お酔象の因に昧し。況や諸の凡位は、豈に能く渙然として氷釈せんや。又た目連は斯の難を免れんと欲して、鐵を以て城を為らんことを請うも、世尊は之を城かしむる勿し。蓋し業報に由り、仏に関わらずして衆生に関わるのみ。誠に此の如きを知れば則ちに多くの疑・詰有るも、灼然として判ずべし。夫れ道[52]徳経に曰く、「兵とは凶器なり、聖人は已むを

得ずして之を用ゆ」と。黄帝の蚩尤、舜[54]帝の有苗、降りて三代に及んで已来、代いに之を無みする無く、仏法未だ興らざるの前より、姑且く之を置す。

至周昭王二十四年[52]甲寅、我世尊降生中天竺。至穆王時、密有文殊、來化穆王。故列子穆王篇中有化人來往之事。當佛教未東之時、大聖親自來化、必有別縁。奈之何周室衰微、致謾矜入駮之譏。

周[55]の昭王二十四年甲寅（前一〇二八）に至って、我が世尊降りて、中天竺に生まる。穆[56]王の時に至って、密かに文殊有りて、来たりて穆王を化す。故に列子の穆王篇中に、化[57]人来往の事有り。仏教未東の時に当って、大聖親自ら来化するは、必ず別縁有り。之を奈何してか周室衰微して、謾矜入駮するの譏を致すや。

始皇三十年甲申、舍衛國沙門利方等十八人、持梵經來秦國、始皇無道、反囚牢獄。神人湧出身長丈五、執金剛摧獄壁[53]、光明遍照、杻械自消、既現神力。又十八賢願力甚深、決非悠悠者也。奈何使始皇未能捨邪歸正。如捕風捉影、徒自虚歸。

始[58]皇三十年甲申（前二一七）、舎衛国沙門の利方等十八人、梵経を持ちて秦国に来たるに、始皇は無道にして反って牢獄に囚う。神人湧出するに身長丈五、金剛を執りて獄壁を摧き、光明遍ねく照らすに杻械自ら消し、既に神力を現わす。又た十八賢は、願力甚だ深けれども、決して悠悠の者に非ざるなり。始皇をして未だ邪を捨て正に帰せしむること能わざるを奈何せん。風を捕え影を捉えんとするが如く、徒自に虚しく帰る。

漢武帝元狩[54]庚申、霍去病討匈奴、過[56]居延山、禽休屠王、獲其金人、則似如佛法先入於匈奴中[57]。雖然如是其肯曰左賢王右賢王、無封豕[58]長蛇之志耶。

漢[59]の武帝、元狩庚申（前一二一）、霍去病、匈奴を討ち、居延山を過ぎ、休屠王を禽え、其の金人を獲たるは、則ち仏法の先に匈奴中に入るが似如し。是の如く其れ肯って左賢王・右賢王と曰うと雖然も、封豕・長蛇の志無けんや。

逮夫荘[59]帝始夢、摩騰初儀釈典、肇興於洛陽白馬寺。胡僧繼至於符堅赤烏年、以至宋晋齊梁陳隋唐後五代、至今趙宋。三朝僧傳十科之中、或諸傳記、高僧神迹、浩以千數、傳芳續焰、佛法大行。然亦世世禍萠不藏、兵火不息。

夫れ荘[60]帝始めて夢みるに逮んで、摩騰初めて釈典を儀し、肇めて洛陽の白馬寺を興す。胡僧継いで符堅の赤烏年（二三八―二五一）に至り、以て宋・晋・斉・梁・陳・隋・唐後の五代に至り、今の趙宋に至る。三朝の僧伝十科の中、或は諸の伝記、高僧の神迹、浩きこと千数を以てし、芳を伝え焔を続ぎ、仏法大いに行わる。然れども亦た世世に禍萠えて蔵れず、兵火息まず。

惟我海東三韓、自佛教初來至今八百六十二年。新羅則自我道肇迹、厭髑滅[60]身、厥後朗智圓光惠空慈藏元曉義湘、諸聖相繼而作、結軌[61]連鑣[62]。此皆欝乎佛庭之直臣、凛乎僧壇之大將、或造疏弘經則不減於馬龍、或現神護法則却齊於澄什。撥瞽[63]披盲[64]、仁澤成霧、普潤無邊、尚干戈不息。當時雖有慧通之朱筆退軍、明朗之神印壓兵、加於可加。此復別論。

惟うに我が海東三韓は、仏[61]教初来より、今に至るまで八百六十二年。新羅は則ち我[62]道より肇迹り、厭髑[63]身を滅し、厥の後、朗智・円光[65]・恵空[66]・慈蔵[67]・元暁[68]・義湘[69]、諸聖相い継ぎて作り、軌を結ぎ鑣を連ぬ。此れ皆な仏庭に

鬱乎たるの直臣、僧壇に凛乎たるの大将にして、或は疏を造り経を弘むるときは則ち馬〔鳴〕・龍〔樹〕を減ぜず、或は神を現わし法を護るときは則ち却って〔仏図〕澄・〔羅〕什に斉し。瞽を撥き盲を披き、仁沢は霧と成り、普ねく無辺を潤すも、尚お干戈息まず。当時、慧[70]通の朱筆軍を退ぞけ、明[71]朗の神印、兵を圧す有ると雖も、加うべきを加う。此れ復た別論せん。

高[65]句麗普徳法師。當國家衰末、寶藏王酷信五斗米道、不敬三寶、喪無日矣。二年癸卯、遣使唐朝、表請道士。大宗遣叔[66]達等八人、并諸道經。王喜其初來、取伽藍以舘之。徳乃上疏諫止、至于再三、王終不依允。於是與聖弟子十一人、一夜[67]飛方丈、到南國景福山。翌年王京果滅。既現神迹、何不坐鎮兵災而遠遁耶。

高[72]句麗の普徳法師。国家の衰末に当って、宝蔵王は五斗米道を酷信して三宝を敬わず、喪すること無日。二年癸卯（六四三）、使を唐朝に遣わし、表もて道士を請う。大宗は叔達等の八人、并びに諸の道経を遣わす。王、其の初めて来たるを喜び、伽藍を取り、以て之に舘せしむ。〔普〕徳は乃ち疏を上って諫止すること、再三に至るも、王は終に依允わず。是に於て聖弟子十一人と、一夜、方丈より飛びて南国の景福山に到る。翌年、王京果して滅ぶ。既に神迹を現ずるに何ぞ兵災を坐して鎮めずして遠く遁るるや。

其或百[68]濟國達拏[69]山之惠顯、誦法花而現通、楞伽山之眞表、感聖身而行懺。是時皆有唐兵則蘇定方高侃[70]領之、羅兵則金庾信統之。猶大山之壓小卵、欻滅卞馬二國乃終。羅兵與唐兵、凡十八戰、而雖十八皆勝、不如坐尚無爲。

其れ或は百[73]済国達拏山の恵顕は法花を誦して通を現わし、楞[74]伽山の真表は聖身を感じて懺を行ず。是の時皆な唐兵有りて則ち蘇定方・高侃之を領し、羅兵は則ち金庾信之を統ぶ。猶お大山の小卵を圧するが如く、欻に卞[75]・

馬の二国を滅して終る。羅兵と唐兵とは凡そ十八戦して十八皆な勝つと雖も、坐して無為を尚ぶに如かず。

是知兆民之於兵也、皆業感所致之然耳。若過現縁熟則不費一毫、聖必自救、若過現無縁則雖設百計、聖亦如何。若鼓腹之用、獨爲是、則自世尊文殊、中華東國天下諸聖皆非也、須一状領過。當知感應因果之理、須作四句分別。

是に知る、兆民の兵に於けるや、皆な業感致す所の然るのみなることを。若し過現の縁熟するときは則ち一毫をも費さずして、聖必ず自ら救い、若し過現の縁無きときは則ち百計を設くと雖も、聖も亦た如何せん。若し鼓腹の用のみ独り是と為さば則ち世尊・文殊より中華東国の天下の諸聖は皆な非なり、須らく一状もて領過すべし。当に感応因果の理を知り、須らく四句分別を作すべし。

一冥機冥應者、若過去善修、現世未運、借往善力、名爲冥機。雖不現見靈應、密爲法身所益。二冥機現應者、若過去植善、冥機已成、便得値佛聞法。如佛初出世、最初得度之人、現在何嘗修行。諸佛照其宿機、自往度之。三現機現應者、三業精修而能感降。如須達長跪、佛往祗洹、月蓋曲躬、聖居門閫。四現機冥應者、如人現善濃積而不現感[71]、冥有其益。

一[76]に冥機冥応とは若し過去に善修し、現世に未だ運ばず、往善の力を借らば、名づけて冥機と為す。霊応を現見せざると雖も、密かに法身の益する所と為る。二に冥機現応とは若し過去に善を植え、冥機已に成らば、便ち仏に値いて法を聞くを得たり。仏初めて出世して最初に度を得たる人の如きは、現在何ぞ嘗て修行せんや。諸仏は其の宿機を照らして、自ら往きて之を度す。三に現機現応とは三業精修して能く感降す。須達[77]は長跪し、仏は

祇洹に往き、月蓋[78]は躬を曲げ、聖は門閫に居すが如し。四に現機冥応とは人の現善濃かに積めども現感せず、冥に其の益有るが如し。

且此四句、非我凡庸孟浪之説、本吾佛祖誠諦之言。若得此意、一切低頭擧手、福不虚弃。終日無感、終日無悔。若見喜殺者長壽、好施者長貧、不生邪執。故龍樹曰、今我疾苦、皆由過去、今生修福、報在將來。

且らく此の四句は、我が凡庸の孟浪の説に非ず、本と吾が仏祖誠諦の言なり。若し此の意を得れば、一切の低頭も挙手も、福虚しく棄てず。終日感無きも、終日悔い無し。若し殺を喜ぶ者の長壽にして、施を好む者の長に貧なるを見るも、邪執を生ぜず。故に龍樹曰く、「今我れ疾苦するは皆な過去に由る、今生に福を修すれば、報は将来に在り」と。

又如世間鴉[72]鵲鳴而喜事來、蜘蛛掛而行人至。況聖境界不思議妙感應、如一月不降、萬水不升、一月一時普現衆水。將謂佛法無靈驗乎。何勞喜[73]生憂死耶。

又た世間には鴉鵲鳴[80]けば喜事来たり、蜘蛛掛くれば行人至るが如し。況てや聖境界[81]は不思議にして妙に感応すること、一月降らず、万水も升らずして、一月は一時に普ねく衆水に現わるるが如し。将に謂えり、仏法は霊験無からんか、と。何ぞ生を喜び死を憂うるを労せんや。

續[74]高僧傳護法篇中、法琳法師云、「按前漢藝文志所記、衆書一萬三千二百六十九卷、莫不功在近益、俱未暢遠途、誠自局於一生之内、非逈拔於三世之表。」誠哉是言。

続[62]高僧伝護法篇中、法琳法師云く、「前漢芸文志の記す所を按ずるに、衆書一万三千二百六十九巻、功は近益に在らざる莫く、俱な未だ遠途を暢べず、誠に自ら一生の内に局り、三世の表に逈拔するに非ず」と。誠なるかな是の言。

山野向所言三教不異者、蓋由好生惡殺則近乎慈悲、博施濟衆則近乎喜捨、福善禍淫則近乎報應、絶聖棄智則近乎反性而已。若望界外無生[75]之旨、何異螢火於日月乎、蟻垤於山岳乎。然欲使元元遷善、駈入仁壽之域者、不可一日無之矣。況此金口一音之教、在在處處第有小許流通。則雖能弘之人未能如説修行、必有諸天加護。何況三觀研其心、五悔助其道、内外能修精進者。

山野が向に言う所の三教異ならざる者にして、蓋し由お生を好み殺を悪むときは則ち慈悲に近く、施を博くして衆を済うときは則ち喜捨に近く、善を福とし淫を禍とするときは則ち報応に近く、聖を絶し智を棄つるときは則ち性に反るに近きのみ。若し界外の無生の旨を望まば、何ぞ蛍火を日月とし、蟻垤を山岳とするに異ならんや。然れども元元をして善に遷らしめ、仁壽の域に駈せ入らしめんとせば、一日として之を無すべからず。況や此の金口一音の教えは在在処処、第だ小許の流通有るのみなるをや。能く弘むる人の未だ説くが如く修行すること能わざると則雖も、必ず諸天の加護有り。何ぞ況や三観もて其の心を研め、五悔もて其の道を助け、内外能く修して精進する者をや。

不見南山感通傳云、「人中臭氣、上熏於空四十萬里、諸天清淨、無不厭之。但以受佛付囑、守護佛法、見其一善、忘其百非、尚與人同土[76]、不敢不來。」又云、「西天菩提大寺僧戸數萬、厨内魚骨羊脛、劇於屠肆。然亦守護、不令鬼加之。」是知佛法豈可以輕心慢心能忖度耶、要須信力堅固、誓願怱然、始可有荷擔兮。況今所弘靈

山、開現佛乘、偏有縁於此土。

見ずや、南山感通伝に云く、「人中の臭気、上りて空四十万里に熏じ、諸天の清浄、之を厭わざる無し。但だ仏の付嘱を受け、仏法を守護するを以て、其の一善を見て、其の百非を忘じ、尚お人と土を同じうせんとして、敢て来たらざるなし」と。又た云く、「西天の菩提大寺には僧戸数万、厨内には魚骨羊脛、屠肆よりも劇し。然れども亦た守護して、鬼をして之を加えしめず」と。是に知りぬ、仏法は豈に軽心慢心を以て能く付度すべけんや、要須ず信力堅固、誓願怱怱にして、始めて荷擔有るべし。況や今弘む所の霊山に仏乘を開現し、偏えに此の土に縁有るをや。

何者、昔聖祖草剏之際、行營福田、能兢親傳、道侂聖訣、以三乘會一乘、三觀在一心、甚深妙法、合我會三之國。上奏天聰故。至宣王三年、大覺國師入宋求傳此土、奉此會三歸一之宗、福此會三合一之基。其來尚矣。

何となれば、昔、聖祖草剏の際、行營と福田、能く兢みて親しく伝うるに、道侂聖訣すらく、「三乘は一乘に会し、三観は一心に在るを以て、甚深の妙法は、我が会三の国に合せり」と、天聡に上奏するが故なり。宣王三年（一〇八六）に至って、大覚国師は入宋して求めて此の土に伝え、此の会三帰一の宗を奉じ、此の会三合一の基を福う。其れ来たるや尚し。

然此秘要之藏、如來現在猶多冤嫉、況滅度後。佛語分明。比及後世、運鐘百六之會、或爲頓廢。故有識者、皆蠹[77]然傷心。幸今聖主賢臣、翹誠外護、發願中興。豈一大事無靈驗耶。

然れども此の秘要の蔵は、「如来現在にすら、猶お冤嫉多し、況や滅度後をや」と。仏語ること分明なり。後

世に比及んで運りて百六[88]の会に鐘り、或は頓廃と為る。故に有識者は皆な蠹然として心を傷ます。幸にして今、聖主、賢臣、誠を翹げて外護し、願を発して中興せんとす。豈に一大事、霊験無からんや。

夫會三風土相合之旨、非但道侂始説。昔天台第九祖荆溪禪師、於法花記中、曾已解釋、若合符節。其文甚詳。今[78]撮其要曰、「在昔未會、如一國内二三小王各理、蒼品未歸大國。若會已後、同霑一化、民無二主、國無二王。」以祖師之此言、必皇朝之寖[79]盛不疑、何小。且經中千世界微塵數菩薩、發願流通、「於後五百歳、若此法門永永廣宣、必有如許大菩薩神力加持。」

夫れ会三の風土、相い合するの旨は、但だ道侂始めて説くに非ず。昔、天台第九祖荆溪禪師、法[89]花記中に於て、曾て已に解釈し、符節に合するが若し。其の文甚だ詳なり。今其の要を撮して曰う、「[90]在昔未だ会せざるとき、一国内の二三の小王各の理め、蒼品未だ大国に帰せざるが如し。会して已後の若きは、同じく一化に霑い、民に二主無く、国に二王無し」と。祖師の此の言を以て、必ず皇朝の寖に盛んなること疑わず、何そ小ぜんや。且つ経中の千世界の微塵数の菩薩、流通せんことを発願すらく、「後[91]五百歳に於て、若し此の法門、永永に広宣せば、必ず許の如き大菩薩の神力の加持有らん」と。

吾國其庶幾大平。若擧揚妙法之旨、一切衆生十二時中現前妄念、即[80]是一大事。豈有此外別求道理。故云、「阿鼻依正、全處極聖之自心、毘盧身土、不逾下凡之一念。」刹説塵説、色徧心徧、但衆生長劫用理、長劫不知、徧空二乗、愚験[81]不受、漸修大士、疑惑未除、唯圓頓行人、初心能信、與佛不二。然此妙旨、同道方知。故佛言、「無智人中、莫説此經。」

吾が国は其れ太平を庶幾う。若し妙法の旨を挙揚せば、一切衆生の十二時中に現前する妄念、即ち是れ一大事なり。豈に此の外に別に求むる道理有らんや。故に云う[92]、「阿鼻も依正も全て極聖の自心に処り、毘盧身土は下凡の一念を逾えず」と。刹説塵説、色徧心徧なること、但だ衆生は長劫に理を用いるも長劫に知らず、偏空の二乗は愚騃にして受けず、漸修の大士は疑惑未だ除かず、唯だ円頓の行人のみ、初心にして能く信じ、仏と不二なり。然れども此の妙旨は同道にして方に知る。故に仏言わく[93]、「無智人中に此の経を説く莫れ」と。

伏惟閣下、留神生信焉。昔李唐高僧法慎、洞達法花妙慧、學該[92]内外。以文字度人故、工於翰墨、以法皆佛法故、兼采儒流。當時公卿名士、多從之遊。如黄門侍郎盧藏用、太子少保陸象先、吏部侍郎嚴挺之、大尉房琯、中書平章崔渙、詞人王昌齢等、皆歸心問法。

伏して惟みるに閣下は神を留めて信を生ぜり。昔、李唐の高僧法[94]慎、法花の妙慧に洞達し、学は内外を該ぬ。文字は人を度すを以ての故に翰墨を工にし、法は皆な仏法なるを以ての故に兼ねて儒流を采る。当時の公卿名士、多く之に従って遊ぶ。黄門侍郎の盧蔵用・太子少保の陸象先・吏部侍郎の厳挺之・大尉の房琯・中書平章の崔渙・詞人の王昌齢等の如きは、皆な帰心問法す。

今山野學業未精、況五明韋陁古籍、粗知大概而已。雖不及法慎遠矣、然閣下慕道之心、猶不下於盧藏用王昌齢輩。苟能時時反照不已、則不借山僧死語、必有自肯一笑處。切祝切祝。山僧法筵告罷、江南二月、鷓鴣始啼、躑躅初發、萬水千山、從吾所好。謹覆。

今、山野は学業未だ精ならず、況や五明韋陁の古籍、粗まし大概を知るのみなるをや。法慎に遠く及ばずと雖

も、然れども閣下の道を慕うの心は猶お盧蔵用・王昌齢の輩より下ならず。苟し能く時時に反照して已まずんば則ち山僧が死語を借らずして、必ず自肯一笑の処有らん。切に祝る、切に祝る。山僧の法筵、告げ罷み、江南二月、鷓鴣始めて啼き、躑躅初めて発く、万水千山、吾が所に従って好し。謹んで覆す。

〔校記〕

原＝松広寺本『湖山録』（『大苞寺誌』影印本〈韓国寺志叢書第六輯、亜細亜文化社、一九七九〉、『韓国天台思想の展開』所載影印本〈民族社、一九八八〉）

一枝本＝一枝庵本『湖山録』（許興植『真静国師と湖山録』所収影印本）

万徳本＝『万徳寺志』巻二所収本

全書本＝『韓国仏教全書』第六冊所収校定本（東国大学校出版部、一九八四）

許本＝許興植校定本（『真静国師と湖山録』所収）

(1)「證」　原・全書本誤作「訂」、拠一枝本・許本改。

(2)「實」　原・一枝本作「実」、全書本・許本改「實」、今拠全書本・許本。

(3)「白」　原・一枝本・全書本・許本作「曰」、今拠文意改。

(4)「廊」　原・一枝本・全書本作「郎」、許本誤「即」、今拠文意改。

(5)「隔」　原作「屬」、全書本作「屬」、一枝本・許本作「隔」、今拠一枝本・許本。

(6)「擢」　原・全書本誤「獿」、一枝本誤「濯」、許本校改「擢」、今従許本。

(7)「駢四儷六之乎者也」　「儷」之字、原・一枝本・全書本・許本作「僮」、今校改。「六之」之二字、一枝本誤倒。

(8)「及」　一枝本脱。

(9)「予」　一枝本脱。

(10)「昔三邦鼎沸」　万徳本從此有。
(11)「龍」　一枝本誤「籠」。
(12)「立功」　万徳本無。
(13)「自是子生孫孫又生子雲之仍之繼繼不絶」　万徳本作「自是子孫係係不絶」。
(14)「聖祖」　万徳本作「祖聖」。
(15)「挺挺」　原・全書本作「推」、今拠一枝本・万徳本改。
(16)「先祖察訪使奏褒一等、先人亦居一等」　原・全書本無、今拠一枝本・万徳本補此割注。
(17)「圭組」　原・全書本・一枝本・許本作「主組」、今拠万徳本改。
(18)「歃吸」　万徳本・許本作「歃吸」。
(19)「絳雪」　原・全書本・一枝本・許本誤「絡雪」、今拠万徳本改。
(20)「流」　原・全書本誤「沫」、今拠一枝本・万徳本改。
(21)「疏」　万徳本作「拔」。
(22)「先人外出甲科紅牌家傳吾及見之」　原・全書本無、今拠一枝本・万徳本補此割注、「家傳」之二字、万徳本・許本無。
(23)「匈」　原・一枝本・全書本・許本作「凶」、今拠万徳本改。
(24)「闞」　万徳本作「闕」。
(25)「驕」　一枝本・万徳本作「矯」。
(26)「被」　一枝本誤「彼」。
(27)「閭」　原脱、拠一枝本・万徳本補
(28)「縱」　原・全書本誤「蹤」。

(29)「皆」　万徳本無。
(30)「事刃」　万徳本作「剸刃」。
(31)「鬨」　原・全書本誤「開」、一枝本作「鬨」、許本校改「鬪」、今拠万徳本改。
(32)「因是古人有言曰……所期物亡其中」之四九字　万徳本無。
(33)「夫」　原・全書本・一枝本・許本誤「大」、今拠『史記』原文校改。
(34)「如是而都末中…則眞名教場一罪人耳」之三四字　万徳本無。
(35)「吾與點」　原・全書本・一枝本・許本作「高興點」　万徳本作「高與點」、今拠論語先進篇校改。
(36)「又云正直捨方便…亦不聞五時終卒」之四五字万徳本無。
(37)「當此後五百歳」　万徳本無。
(38)「間」　万徳本無。
(39)傅相譯述　原・全書本・一枝本作「傳相譯」、万徳本・許本作「傳相譯述」、今拠文意校改。
(40)「象」　原・一枝本・全書本誤「衆」、許本校改「象」、今拠万徳本改。
(41)「其間遊歴他方…」　此以下、万徳本欠。
(42)「棲」　一枝本誤「接」。
(43)「而來」　一枝本誤倒。
(44)「臺」　原似「畳」字、全書本作空格、一枝本・許本作「臺」、今拠一枝本改。
(45)「持」　一枝本誤「技」。
(46)「拯」　原・全書本誤「極」、今拠一枝本改。
(47)「未」　原・全書本誤「末」、今拠一枝本改。
(48)「何」　一枝本脱。
(49)「證」　原・全書本誤「訂」、今拠一枝本改。

(50)「因況」　一枝本誤倒。
(51)「黄」　一枝本・許本誤「皇」。
(52)「年」　原・全書本脱、今拠一枝本補。
(53)「壁」　一枝本作「辟」。
(54)「元符」　原・全書本・一枝本・許本誤「元符」、今校改。
(55)「匈」　原・全書本・一枝本・許本作「凶」、今校改。
(56)「過」　原改「遏」於「過」、全書本作「遏」、今拠一枝本改。
(57)「匈」　原・全書本・一枝本・許本作「凶」、今校改。
(58)「豕」　原・全書本誤「丞」。
(59)「莊帝」　一枝本誤倒。
(60)「滅」　原・全書本・一枝本作「王」、許本校改「滅」、今従許本。
(61)「軌」　一枝本誤「輒」。
(62)「鑣」　原・全書本・一枝本誤「鑣」、許本校改而誤「鑣」、今拠文意改。
(63)「瞽」　一枝本誤「皷」。
(64)「披」　許本校改而誤「按」。
(65)「高句麗」　一枝本作「句高麗」。
(66)「叔」　原・全書本・一枝本・許本作「釋」、今校改。
(67)「夜」　一枝本誤「衣」。
(68)「百」　一枝本誤「白」。
(69)「拏」　原・全書本作「摩」、拠一枝本改。
(70)「侃」　一枝本誤「保」。

(71)「感」　許本誤「惑」。
(72)「鴉」　一枝本空格。
(73)「喜」　一枝本・許本無。
(74)「續」　原・全書本・一枝本作「讀」、許本校改「續」、今從許本。
(75)「生」　一枝本誤「無」。
(76)「土」　一枝本誤「上」。
(77)「蠹」　原・全書本誤「盡」、今拠一枝本改。
(78)「今」　原・全書本誤「令」、拠一枝本改。
(79)「寖」　原・全書本・一枝本・許本作「寢」、今拠文意校改。
(80)「即」　一枝本誤「耶」。
(81)「駭」　原・全書本・一枝本・許本作「駭」、今拠文意校改。
(82)「該」　一枝本誤「諺」。

〔註〕

①芸臺亞監＝秘書省次官。
②閔昊＝昔、学友であったこと以外は不詳。
③正月日＝手紙の内容から恐らくは一二四二年のこと。
④羅漢不識赤鹽之問＝湛然『止観輔行伝弘決』巻第四之四、「言五種鹽者、大論二十四云、六師不聽食五種鹽、未審彼土五鹽如何。若此土五鹽、謂顆鹽緑鹽赤鹽白鹽印鹽、鹽有多類、大略五耳。西方準此亦應可見。有阿羅漢、為他所問何名赤鹽、不識所從而問三藏。三藏云、鹽是味、赤是色。未曉小事者由未有出假智故」（T四六―二七三中）。

⑤示詳一時＝教え示すことと詳しく知ることが同時である意か。待考。

⑥世尊有言、我遣三人化彼震旦＝法琳撰『破邪論』巻上、「清淨法行經云、佛遣三弟子震旦教化。儒童菩薩彼稱孔丘、光淨菩薩彼云顔回、摩訶迦葉彼稱老子」（T五二―四七八下）。

⑦李舟曰……＝『太平広記』巻一百一、「唐虔州刺史李舟與妹書曰、釋迦生中國、設教如周孔、周孔生西方、設教如釋迦、天堂無則已、有則君子登、地獄無則已、有則小人入。識者以爲知音。」

⑧李商隱亦曰…＝肅宗皇帝「三教聖象賛」にいう、「吾儒之師曰魯仲尼、仲尼師聃龍。吾不知、聃師竺乾、善入無爲。稽首正覺、吾師師師」（『唐文続拾遺』巻一）。この賛は『折疑論』巻四（T五二―八一五中）にも「肅宗三教畫讃」として引かれているが、紹興十四年（一一四四）宝覚円通法済大師法道の「重開僧史略序」（T五四―二三四下）や元の祥邁撰『辯僞録』巻二（T五二―七六三中）では、「唐李商隱〔字義山〕三教賛曰」として引かれる。待考。

⑨栢直口尚乳年＝栢（柏）直は魏の大将の名であるが、ここでは「口尚乳年」に意味があり、柏直はそれに対するまくら言葉になっていよう。魏豹が漢王高祖にそむいたとき、酈食其を使わして説得したが聞き入れず、食其が還（かえ）ってきたときの漢王との対話にいう、「漢王問、魏大將誰也。対曰、柏直。王曰、是口尚乳臭、不能當韓信。」（『漢書』巻一上・高帝紀第一上）。「口尚乳臭」は師古の注に「其の幼少を言う」とある。『漢書』を受けて、『蘇東坡詩集』巻二十八「見子由與孔常父唱和詩、輒次其韻」の詩に「灞陵間老將、柏直口尚乳」とあり、東坡詩の句を受ける。

⑩塲廈廊＝大学に入学するための試験場のことか。

⑪士板＝仕版は官吏の名簿のこと。ここでは入学許可の名簿にのることであろう。

⑫辟雍＝西周天子の設けた大学。

⑬東摩＝不詳。

⑭若同胎然＝不詳。「同胎」は「同胞」とすべきか。全書本は「若同胎　然蓋實録耳」と句読している。

⑮墨兵黄妳＝墨兵は史書の別称、黄妳は書巻の別称。

⑯月脇＝奇抜で奥深い境地。皇甫湜『唐故著作左郎顧況集序』、「偏於逸歌長句、駿發踔厲、往往若穿天心、出月脇、意外驚

人語、非尋常所能及、最爲快也」（『全唐文』六八六）。

⑰文昌崔致遠＝八五七―？。新羅時代末の学者。字は孤雲、海雲。十二歳のときに唐に留学し、八七四年科挙に合格した。黄巣を討つ檄文を草して名を挙げた。八八五年帰国、八九四年阿飡の位を授けられたが、やがて職を辞して諸国を遍歴し、伽倻山に隠退して没した（平凡社『世界大百科事典』参照）。高麗の太平二年（一〇二二）に文昌侯を贈らる。『崔文昌侯全集』（成均館大学校出版部、一九七二年）がある。

⑱金克己＝高麗明宗（一一七一―一一九七年在位）代、広州の人、号は老峰。「童齔より頴悟、口を開けば即ち章を成す。仕官を樂しまず。進士の第に登りてより、復た京師に入りて、勢を権門に借るを欲せず、悠々として山林に嘯咏す。故に文誉益高く、官途益阻む。明宗之を聞き召して翰林に直せしむ。未だ幾ならずして卒す。當時の詩人其の詩を評して屬辭清曠、言多益富と言ふ。」（『朝鮮人名辞書』、昭和十二年、朝鮮総督府中枢院、昭和四七年複製版発行、臨川書店）。著書に『金居士集』有り。『東文選』巻四・九・十三・十九・三一・三五・三八・四二・四八・一一〇・一一五に詩文を録す。

⑲竺卿＝釋氏の通稱。『祖庭事苑』巻四参照。

⑳竺典＝仏教経典。明の袁宗道『送夾山母舅之任太原序』、「道徳・南華以及竺典亦多渉獵、揮麈援毫、往往有效」。

㉑聖典有之……＝『百喩経』巻三の「（四三）磨大石喩」（T四―五四九下）が典拠。

㉒不孝有三、無後爲大＝『孟子』離婁章句上の句。

㉓大祖＝高麗太祖神聖大王。八七七―九四三。〔六二〕の注を参照。

㉔雲之仍之＝雲仍（遠孫）を四字にしたもの。

㉕羅王之外孫＝新羅王の外孫のことであろう。

㉖聖祖＝高麗太祖のこと。『三国遺事』巻五「明朗神印」条、「廣學大德・大縁三重昆季二人、皆投神印宗、以長興二年辛卯、隨太祖上京……則廣學・大縁二人、隨聖祖入京者」（T四九―一〇一下）。

㉗蓬山＝秘書省の別称。

㉘柏署＝御史官署の別称。

㉙玄霜・絳雪＝共に仙薬。『初学記』巻二に『漢武帝内伝』を引いていう、「仙家上薬有玄霜・絳雪」。

㉚蝸國之戰爭＝かたつむりの左角の国と右角の国が土地を争い、死者数万を出して十五日で戦いが終ったという『荘子』則陽篇の話を踏まえる。無限なるものに対して有限なるもののちっぽけさに喩う。ここでは堅牢久遠ならざるものの喩とされているが、もとの喩の意とくい違う。

㉛半通泉貨＝泉貨は貨幣のこと。半通については不明。辞書によれば下級官吏が使用する半印（長方形の印）のこととある。待考。

㉜古人有言曰…所期物亡其中＝『史記』巻七五・孟嘗君列傳、「君獨不見、夫朝趣市朝者乎。明旦、側肩爭門而入、日暮之後、過市朝者掉臂而不顧。非好朝而惡暮、所期物忘其中」。

㉝末中＝末法中の意か。

㉞所聞所見可爲長大者＝仏法を見聞することが長大である者ではないの意であろう。『法華文句』巻六上、「年既幼稚者、舊云、聞法少爲稚。若爾下文云長大、應是聞法多。今以無明厚重覆障解心、解心無力故言幼稚、善根熏被稍稍欲著名爲長大」（T三四―八〇下）。

㉟教場＝普通には軍事教練場の意。ここでは仏道修行の場の意であろう。

㊱丹桂主人清河相國＝万徳寺本は、「即崔滋也」と小注する。待考。

㊲吾與點＝『論語』先進篇に於て孔子が弟子たちに、人に認められたら何をしたいかを問うたとき、曾晳の答えに賛成した語。転じて長者の賛助をいう。

㊳諸佛世尊…出現於世＝『法華経』方便品の句。

㊴正直捨方便但説無上道＝『法華経』方便品の偈句。

㊵知臺檀越＝知臺は御史臺の長官のことか。臺は中央政府の官署であり、御史台を指すことが多い。待考。

㊶逢場作戯＝その場その場で自在に演ずること。『景徳伝灯録』巻六・馬祖章、「鄧隱峰辭師。師云、什麽處去。對云、石頭去。師云、石頭路滑。對云、竿木隨身、逢場作戯。便去」。

㊷反愧無似之人＝（高官の大檀越に請ぜられた風を見て万徳山にやって来て勝手放題して）全く慙愧のない人の意か。待考。

㊸蝗蠹桂玉＝虫に喰われて台なしになった高価な柴米。桂玉は桂薪玉米。

㊹當隣兵之奸寇乃皷腹……＝『宝林伝』巻四・第二十二祖摩拏羅章、「忽見一人而至殿前、奏曰、今此城南有百萬象兵而入國界。王聞此事、心生憂惱、以何兵衆、而戰得勝。尊者曰、今此事者、而亦易爲。王有太子、其力難比。令此太子而敵得之。……尒時太子、奉王勑詔命戰象兵、即至城南、端然而立。其象兵衆、漸漸而進。尒時太子、即己右手、拍其腹上、此象衆等、悉皆崩倒、更不復起。試喝一聲、六返振動。」（訳注『宝林伝』巻四、四〇頁、駒沢大学禅宗史研究会）、『宝林伝』巻四・第二十一祖婆修盤頭章、『祖堂集』巻二・第二十一祖章にも見える。

㊺唐鄧隱峰……＝『宋高僧伝』巻二十一・隱峰傳、「峯元和中言游五臺山、路出淮西、屬吳元濟阻兵、違拒王命。官軍與賊遇、交鋒未決勝負。峯曰、我去解其殺戮。乃擲錫空中、飛身冉冉隨去、介兩軍陣過、戰士各觀僧飛騰、不覺抽戈匣刀焉」（T五〇―八四七上）。

㊻天網恢恢疎而不漏＝『老子』第七十三章の句。

㊼一路涅槃門＝『首楞厳経』巻五の偈句、「十方薄伽梵、一路涅槃門」（T一九―一二四下）。

㊽璃喉大覺＝仏世尊のこと。「璃喉」は明らかならず、何か誤りがあるかも。

㊾金鏘馬麥…旃遮謗路＝仏の九悩（九厄・九横・九難・九罪報とも）のうちの六を挙げる。金鏘は乞食していたとき、金鏘（槍のこと）が脚を刺す報を受けたこと。馬麦は九十日にわたって馬麦を食べねばならなかったこと。乞食空鉢は食を乞うて得られなかったこと。寒風索衣は冬至の前後に三衣で寒を凌がねばならなかったこと。調達推山は提婆達多に岩を落とされたこと。旃遮謗路は旃遮婆羅門の女にそしられたこと。『法華文句記』巻第七中、「大論第九、佛有惱。謂六年苦行、孫陀利謗、金鏘・馬麥、瑠璃殺釋、乞食空鉢、旃遮女謗、調達推山、寒風索衣、加雙樹背痛爲十。若依興起行經、但有七縁、無孫陀利謗及乞食不得。大論直列、興起行委悉釋之」（T三四―二八三上）。

㊿瑠璃王放醉象、踏殺五百釋種＝『賢愚経』巻三・微妙比丘尼品第十六、「波斯匿王崩背之後、太子流離、攝政爲王、暴虐無道、驅逐醉象、蹋殺人民、不可稱計」（T四―三六七上）。瑠璃王が釈種を大量に虐殺したことは、『増一阿含経』巻二六（T

二―六九〇上以下）、『流璃王経』（T一四―七八三中以下）に詳しい。

㊿目連欲免斯難…世尊勿使城之＝『増一阿含経』巻二六、「爾時目連復白佛言、唯願聽許以鐵籠疏覆迦毘羅越城上。世尊告曰、云何目連、能以鐵籠疏覆宿縁乎。目連白佛、不也世尊。佛告目連、汝今還就本位、釋種今日宿縁已熟、今當受報」（T二―六九一中）。

52道徳經曰…＝『老子』道経上、偃武第三十一、「兵者不祥之器、非君子之器。不得已而用之、恬惔爲上」。

53黄帝之蚩尤＝黄帝のとき、蚩尤乱を作し、涿鹿の野に戦ってこれを伐ったこと。『史記』五帝記第一。

54舜帝之有苗＝舜帝のとき、有苗を三危に追放し、また禹に命じて征伐させた。『尚書』舜典第二・大禹謨第三。

55至周昭王二十四年甲寅、我世尊降生中天竺＝『周書異記』云、「周昭王即位二十四年甲寅歳四月八日、江河泉池忽然泛漲、井水並皆溢出、官殿入舎山川大地咸悉震動。其夜五色光氣入貫太微、遍於西方、盡作青紅色。周昭王問太史蘇由曰、是何祥也。蘇由對曰、有大聖人生在西方、故現此瑞」（『破雅論』巻上、T五二―四七八中）。

56至穆王時密有文殊……＝『道宣律師感通録』、「所問高四臺者、其本迦葉佛、於此第三會説法度人。至周穆王時、文殊目連來化穆王、穆王從之。即列子所謂化人是也。化人示穆王高四臺、是迦葉佛説法處」（T五二―四三六中、また『律相感通伝』〈T四五―八七五下〉にも）。

57列子穆王篇中有化人來往之事＝『列子』穆王篇第一章、「周穆王時、西極之國、有化人來。云々」。

58始皇三十年甲申…＝『釈迦方志』巻下、「釋道安朱士行等經録目云、始皇之時有外國沙門釋利防等一十八賢者、齎持佛經、來化始皇。始皇弗從、遂囚禁之。夜有金剛丈六人來、破獄出之。始皇驚怖、稽首謝焉。准此而言、則知秦漢以前、已有佛法」（T五一―九七〇中）。

59漢武帝元狩庚申…＝『魏書釈老志』、「案漢武元狩中、遣霍去病、討匈奴。至皐蘭、過居延、斬首大獲。昆邪王殺休屠王、將其衆五萬來降。獲其金人。帝以爲大神、列於甘泉宮。金人率長丈餘。不祭祀、但燒香禮拜而已。此則佛道流通之漸也」（塚本善隆訳注『魏書釈老志』九三頁、東洋文庫五一五）。

60荘帝始夢…＝『高僧伝』巻一・攝摩騰伝、「漢永平二年、明皇帝夜夢金人飛空而至。……騰譯四十二章經一卷、初緘在蘭臺

石室第十四間中。騰所住處、今雒陽城西雍門外白馬寺是也。」（T五〇―三二二下）。莊帝は明帝のこと、莊は明帝の名。『資治通鑑』巻四十四、「顕宗孝明帝上〔幼名陽、後改名莊〕」。

⑥1 自佛教初來至今八百六十二年＝仏教の初来は小獣林王二年（三七二）、前秦王苻堅が僧の順道に仏像と経文を送らせたときとされる（『海東高僧伝』巻一及び『三国遺事』巻三・興法第三「順道肇麗」）。それから八百六十二年は一二三三年に当る。先に万徳山に出家（一二二八年）してから十四年と言うのと合わない。待考。

⑥2 我道＝阿道、阿頭とも。『海東高僧伝』巻一及び『三国遺事』巻三・興法第三「阿道基羅」に詳しい。

⑥3 厭髑滅身＝『三国遺事』巻三「原宗興法」、「新羅本記、法興大王即位十四年、小臣異次頓爲法滅身」（T四九―九八七中）。厭髑は名で異次頓のこと。同じく『三国遺事』巻三にいう、「姓朴字厭髑〔或作異次。云々〕」（T四九―九八七中）。

⑥4 朗智＝歃良州（現梁山）の霊鷲山に住し、法華経を講じて神通力があった。新羅文武王時代（六六一～六八〇）の異僧。『三国遺事』巻五「朗智乗雲」に詳しい。『東洋仏教人名事典』四二一頁参照。

⑥5 圓光＝新羅僧。？～六四〇。『東洋仏教人名事典』三一二頁参照。

⑥6 惠空＝七世紀頃の新羅の奇僧。『三国遺事』巻四に詳しい。『東洋仏教人名事典』三〇六頁参照。

⑥7 慈藏＝新羅善徳女王時代（六三二～四六在位）の僧。韓国南山律宗の開祖。『東洋仏教人名事典』三五六頁参照。

⑥8 元曉＝六一七～六八六。新羅の高僧。『金剛三昧経論』『法華経宗要』『梵網経菩薩戒本私記』『大乗起信論疏』等の著述がある。『東洋仏教人名事典』三四五頁参照。

⑥9 義湘＝六二五～七〇二。入唐し華厳第二祖の智儼（六〇二～六六八）に学んだ。新羅華厳宗の始祖。元曉と並び称される。『東洋仏教人名事典』三二四頁参照。

⑦0 慧通之朱筆退軍＝王が逮捕のためにさし向けた兵を前にして、瓶の首に朱筆で一線を引くと、兵の首にも朱線が引かれていた。これに恐れて兵が逃げたこと。『三国遺事』巻五「惠通降龍」参照。

⑦1 明朗之神印壓兵＝文武王八年（六六八）、唐が新羅と連合して高句麗を滅ぼした後、唐の軍隊が新羅を滅ぼそうとしたとき、明朗が神印の秘法によってこれを退けたこと。『三国遺事』巻五「明朗神印宗」参照。

⑫高句麗普德法師…＝『三国遺事』巻三「寶藏奉老、普德移庵」（T四九―九八八中以下）を見よ。

⑬百濟國達拏山之惠顯、誦法花而現通＝『三国遺事』巻五「恵現求静」、「釋惠現、百濟人、小出家。苦心專志、誦蓮經爲業、祈禳請福、靈應良稠」（T四九―一〇一六上）。

⑭楞伽山之眞表、感聖身而行懺＝眞表は新羅景德王時代（七四二―七六五）の律師。霊山寺（楞伽山ともいう）で勤修していると、弥勒が感応して現われて『占察経』二巻と簡を授けられ、それによって懺法を行じたこと。『宋高僧伝』巻一四、『三国遺事』巻四「真表伝簡」。

⑮下馬二國＝下韓と馬韓のことだが、ここでは百済と高句麗を指す。

⑯一冥機冥應者……冥有其益＝『法華玄義』巻第六上、「但衆生根性百千、諸佛巧應無量。隨其種種、得度不同。故文云、『名色各異、種類若干。如上中下根莖葉等。隨其種性、各得生長。』即是機應不同意也。今略言爲四。一者冥機冥應、二者冥機顯應、三者顯機顯應、四者顯機冥應。其相云何。若過去善修三業、現在未運身口、藉往善力、名此爲冥機也。雖不現見靈應、而密爲法身所益。不見不聞而覺而知。是名爲冥益也。二冥機顯益者、過去殖善而冥機已成、便得値佛聞法、現前獲利、是爲顯益。如佛初出世、最初得度之人、現在何嘗修行。諸佛照其宿機、自往度之。即其義也。三顯機顯應者、現在身口精勤不懈、而能感降。如須達長跪、佛往祇洹、月蓋曲躬、聖居門閾。如即行人道場禮懺、能感靈瑞。即是顯機顯應也。四者顯機冥應者、如人雖一世勤苦、現善濃積而不顯感、冥有其利。此是顯機冥益」（T三三―七四八中）。『宗鏡録』巻六一（T四八―七六六中）、『万善同帰集』下（T四八―九八九下）にも引用されている。

⑰須達長跪佛往祇洹＝須達長者の請に応じて、釈尊が祇洹精舎に赴いたこと。『南本涅槃経』巻二七・師子吼菩薩品（T一二―七八五下以下）を参照。

⑱月蓋曲躬聖居門閾＝国に流行している悪病からの救済を月蓋菩薩が釈尊に願い、五体投地して敬礼せよと勧められて行ったところ、観世音菩薩と大勢至菩薩を従えた無量寿仏が城門の門閾（しきい）のところに出現したこと。『請観世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪経』（T二〇―三四中以下）を参照。

⑲若得此意……今生修福報在將來＝『法華玄義』巻第六上の先に引く四句分別の説明にすぐ続いて云う、「若解四意、一切低

頭擧手、福不虚棄。終日無感、終日無悔。若見喜殺壽長、好施貧乏、不生邪見。若不解此者、謂其徒功喪計、憂悔失理。釋論云、『今我疾苦、皆由過去。今生修福、報在將來。』正念無僻、得此四意也」（T三三―七四八中）。

⑧⓪鴉鵲鳴而喜事來、蜘蛛掛而行人至＝『西京雜記』巻三に陸賈の語としていう、「乾鵲噪而行人至、蜘蛛集而百事喜。」鵲は喜事を報ずということについては、項楚『敦煌変文選注』七八六頁の注〔六〇〕に詳しい。

⑧①聖境界不思議妙感應如一月不降…＝『法華玄義』巻第二上、「感應妙者、謂四句感應、三十六句感應、二十五感應、別圓感應。水不上升、月不下降、一月一時普現衆水。諸佛不來、衆生不往、慈善根力、見如此事、故名感應妙」（T三三―六九七下）、『同』巻第六上、「若別圓兩教、初心伏惑、未能有應。初地初住三觀現前、證二十五三昧、法身清淨、無染如虚空、湛然應一切。無思無念、隨機即對。如一月不降、百水不升、而隨河長短、任器規矩、無前無後、一時普現。此是不思議妙應也」（T三三―七四九下）。

⑧②續高僧傳護法篇中…＝巻二四・釈法琳伝中の語（T五〇―六三七上）。

⑧③南山感通傳云…＝『道宣律師感通録』、「佛臨涅槃、親受付屬、並令守護、不使魔嬈。若不守護如是破戒、誰有行我之法教者。故佛垂誡、不敢不行、雖見毀禁、愍而護之。若見一善、萬過不咎。事等忘瑕、不存往失。且人中臭氣、上熏於空、四十萬理、諸天清淨、無不厭之。但以受佛付屬令守護法、尚與人同止、諸天不敢不來」（T五二―四三五下、また『律相感通伝』〈T四五―八七五上〉にも）。

⑧④又云西天菩提大寺…＝『道宣律師感通録』、「今菩提大寺、寺主威猛、象有八萬、僧戸數千萬。王征不得。遶塔之下、日有金帛、收已自納。厨内生魚頭積成大聚、羊腔懸之、劇於屠肆。然亦守護、不令惡鬼害之」（T五二―四四二上、また『律相感通伝』〈T四五―八八二上〉にも）。

⑧⑤道侁聖決…＝他文献に未見。道侁は道詵に同じ。八二七―八九八。高麗大祖王建の誕生と建国を予言したとされ、高麗時代になってその風水地理説及び山川裨祠思想と相俟て信仰されて大きな影響を与えた。『東洋仏教人名事典』三八八頁参照。

⑧⑥大覺國師入宋求傳此土…＝義天（一〇五五～一一〇一）が入宋して天台教学を修め、その典籍を大量にもたらし、高麗天台宗の基を作ったこと。『東洋仏教人名事典』三二六頁参照。

⑧⑦如來現在猶多寃嫉…＝『法華経』法師品第十の句、「此經是諸佛秘要之藏、不可分布妄授與人。諸佛世尊之所守護。從昔已來、未曾顯説。而此經者、如來現在猶多怨嫉、況滅度後」（T九―三一中）。

⑧⑧運鍾百六之會或爲頓廢＝大覚国師が天台宗を伝えてから一〇六法会の後に、この法会はすたれた。何か具體的な事件があったと思われるが不詳。待考。

⑧⑨法花記＝『法華文句記』のこと。

⑨⓪在昔未會…國無二王＝『法華文句記』巻第七中、「次有此經下約此經會教。以今經中部無餘教、部即部中尊極爲王、教即部内教主爲王。既教分大小王亦尊卑、國界寛狹、民有多少、資産各異、所出不同、故部内教、通別二轍。別則當界施恩、通乃須歸大國。故知部教俱須會通。故前云部、後乃云教。在昔未會、如一國内二三小王各理、蒼品未歸大國。故方使教主王名不無、但兼部中圓極主弱。若會已後、同霑一化、民無二主、國無二王」（T三四―二八五中）。

⑨①於後五百歳…＝『法華経』中にピタリと該当する箇所がない。最も近いものは薬王菩薩本事品中の次の箇所である。「我滅度後、五百歳中、廣宣流布、於閻浮提、無令斷絶。惡魔・魔民・諸天・龍・夜叉・鳩槃荼等、得其便也。宿王華、汝當以神通之力、守護是經」（T九―五四下）。

⑨②故云阿鼻依正…＝『宗鏡録』巻一四、「所以先徳云、夫大道唯心、即心是佛、只依一心而修。即是根本之智、亦是無分別智、即能分別無窮、自具一切智故。不同起心徧計。故知凡有心者悉皆成佛。如今行是佛行、坐是佛坐、語是佛語、默是佛默。所以云、阿鼻依正、常處極正之自心、諸佛法身、不離下凡之一念」（T四八―四九二下）。

⑨③故佛言、無智人中莫説此經＝『法華経』譬喩品の偈句、「又舍利弗、憍慢懈怠、計我見者、莫説此經。凡夫淺識、深著五欲、聞不能解、亦勿爲説」（T九―一五中）。

⑨④李唐高僧法慎…＝ここに述べられていることは『宋高僧伝』巻一四・法慎伝に見える。六六六―七四八。太原の懐素律師に律を学び、堂奥に入った。天台止観・東山法門に通じ、また儒説にも通じた。

⑨⑤江南二月鷓鴣始啼＝『景徳伝灯録』巻一三・風穴章に見える風穴の句、「常憶江南三月裏、鷓鴣啼處野花香」を受ける。

〔付録〕2　訓註「答霊岩守金郎中惰書」

答霊岩守金郎中惰書

承諭。具匣蓮経一部、付囑然堅二上人呈似。惟冀日日常讀、讀已能誦、誦已能持。則経中所謂「諸佛出世一大事因縁」、非是他法、不出現前刹那一念。請快添精彩。

霊岩守金郎中惰①に答える書

諭を承りました。具匣の蓮経一部、然・堅の二上人に付嘱して呈似す。惟だ冀わくば、日日に常に読み、読み已って能く誦し、誦し已って能く持せんことを。則ち経中に謂う所の「諸仏出世一大事因縁」は、是れ他法に非ず、現前刹那の一念を出でず。快かに精彩を添えんことを請う。

若匣而藏之、反自以謂、「白底是紙、墨底是墨、何勞勞誦爲、莫如寂然之爲愈。」此乃小乘。所謂「俗有文字、眞無文字」「吾聞解脱之中、無有言説」、非究竟圓頓妙旨。曹溪不云乎、「經有何過、豈障汝念」。從義師云、「禪和貪看諸家語録不少、何不看佛語録耶。佛語録者、十二部經是也」。智者觀心誦經法云、「三世諸佛、無不從此而生」。五祖亦云、「文字是法身氣命、若讀誦通利、是圓家數息停心」。且古之伊蒲塞、常持妙典、專修淨業者、具載傳記、夫復何言。

若し匣にいれて之を蔵し、反って自ら以謂らく、「白底は是れ紙、墨底は是れ墨、何ぞ労労と誦せん為、寂然の愈為るに如ぶ莫し」と。此れ乃ち小乘なり。所謂る「俗には文字有るも、真には文字無し②」「吾れ聞けり、『解脱

の中には言説有る無し』③」にして、究竟円頓の妙旨に非ず。曹渓は云わざらんや、「経に何の過か有らん、豈に汝の念ずるを障げんや④」と。従義師⑤云く、「禅和は諸家の語録を貪り看むこと少なからざるに、何ぞ仏の語録を看まざるや。仏の語録とは十二部経是れなり⑥」と。智者の『観心誦経法⑦』に云く、「三世諸仏は此れ従りして生ぜざるは無し」と。五祖⑧も亦た云く、「文字は是れ法身の気命なり、若し読誦し通利せば是れ円家の数息停心なり⑨」と。且つ古の伊蒲塞の常に妙典を持し、専ら浄業を修する者は、具さに伝記に載す。夫れ復た何をか言わんや。

今即取現世而言之、去丙申冬節、李平章世材、行按南方、躬造白蓮、投名入社、請山野銷二十八品、序正流通、始終圓意、試知開顯教旨、超邁於四時八教也。即生正信、發願誦持。雖判斷忿劇、略無閑暇、夙夜匪懶、始誦得第一卷。反入洛京、既迹山西、但與期門、傾飛卒卒、無暇煖席、尚念念不休、屢經寒暑、便終七軸。至今懸車緑野、日誦不輟、眞在家菩薩也。況雕板印施千餘部、廣結妙因。

今即ち現世を取りて之を言わん。去る丙申（一二三六）の冬節、李平章世材⑩は南方に行按し、躬ら白蓮に造り、名を投じて社に入り、山野を請じて二十八品、序・正・流通を銷（鈔）すに、始終円⑪の意もて試みに開顕の教旨は四時八教より超え邁⑫るを知らしむ。即ち正信を生じ、誦持せんことを発願す。判断忿劇しく、略ぼ閑暇無きと雖も、夙夜に懶る匪く、始めて第一巻を誦し得たり。反りて洛京に入り、既に山西に迹き、但だ期門に與り、傾飛卒卒しく、席を煖むるに暇無きも、尚お念念休まず。屢ば寒暑を経て、便ち七軸を終う。至今は車を緑野に懸け、日に誦して輟めず、真の在家菩薩なり。況や雕板して、千余部を印施し、広く妙因を結ぶをや。

今左右當緑髪[1]而立之歳、受五馬専城之寄、百里獨太古、政簡訟息、鈴齋閒寂、庭可雀羅。若於此時、不研心佛乗、更待何時耶。要須載意、載意又求山中著述。

今左右は当に緑髪にして立つの歳、五馬・専城の寄を受く。百里は独り太古のごとく、政は簡にして訟息み、鈴斎は閒寂、庭には雀羅〔設く〕可きがごとし。若し此の時に於て仏乗に研心せずんば、更に何の時を待たんや。要須ず意を載くべし、意を載けば又た山中に著述を求めよ。

山野逃名、已四十一年于茲矣、但鑽仰佛祖教門、切欲光揚妙理。故所述文疏等、唯採摭佛精祖髓、世間未所顯揚者、唯局山家、讃詠而已、不渉尋常世間之格式多矣。況自佛教東漸已來、廬山遠公、梁朝傅大士誌公、李唐寒山拾得龐蘊等、皆佛聖幻有也。觀其著作、散花貫花、皆直説衆生日用、欲驅入於無生之域耳。非若當途儒匠錦心繡口作爲奇章警句也。吾雖初心、竊添[3]此耳。傳之者誤成篇集、云云不已。若髣爲浮圖氏、不明佛法根源、及著世俗[4]文字、非魔即外、豈佛庭之罪人歟。然所著結社文、及餘伽陁雜文、但記聖迹、其間援引佛祖妙典。要須自[5]叙、稍有深旨。請對面叙。謹覆。

山野は名を逃れて已に茲に四十一年、但だ仏祖の教門を鑽仰し、切に妙理を光揚せんと欲すのみ。故に述ぶる所の文疏等は仏の精・祖の髄の、世間に未だ顕揚せざる所の者を採摭し、唯だ山家に局って讃詠するのみにして、尋常世間の格式多きに渉らず。況や仏教東漸して自り已来、廬山の遠公、梁朝の傅大士・誌公、李唐の寒山・拾得・龐蘊等、皆な仏聖の幻有なり。其の著作を観るに、散花・貫花は皆な衆生の日用を直説し、無生の域に駆け入らんと欲するのみ。当途の儒匠の錦心繡口もて奇章警句を作為するが若きに非ざるをや。吾れ初心なりと雖も、窃かに此に添えるのみ。之を伝える者、誤って篇集を成し、云云して已まず。若し髣って浮図氏と為り、仏法の根源を明らめず、及び世俗の文字に著せば、魔に非ずんば即ち外なり、豈に仏庭の罪人ならん歟。然れば著わす所の結社文、及び余の伽陁・雑文は、但だ聖迹を記し、其の間に仏祖の妙典を援引するのみ。自ら叙べんと要須するものは、稍や深旨有り。対面して叙べんことを請う。謹んで覆す。

〔校記〕

原＝松広寺本『湖山録』（『大苞寺誌』影印本〈韓国寺志叢書第六輯、亜細亜文化社、一九七九〉、『韓国天台思想의展開』所載影印本〈民族社、一九八六〉）。

全書本＝『韓国仏教全書』第六冊所収校定本（東国大学校出版部、一九八四）。

許本＝許興植著『真静国師와湖山録』所収校定本（民族社、一九九五）。

(1)「緑」　原・全書本作「縁」、許本校改「緑」、是。

(2)「龐」　原・全書本・許本作「庞」、「庞」恐俗「龐」之字。

(3)「添」　原似作「忝」、全書本作「忝」、許本校改「添」、今拠許本。

(4)「俗」　原似作「僞」、全書本・許本作「俗」、今拠全書本・許本。

(5)「自」　原似作「白」、全書本作「白」、許本作「自」、今拠許本。

〔註〕

①金惰＝？――一二八四。忠烈王十年秋七月卒（『高麗史』世家二十九）。一二六八年の頃に霊岩（即ち朗州）の太守であり、『湖山録』に「朗州守金惰献詩一首」を収める。元宗十二年（一二七一）、世子諶（後の忠烈王）が元朝に入りて質となったとき、従った。他に『高麗史』世家二十七（元宗十二年・十三年）、世家二十八（忠烈王三年）、世家二十九（忠烈王十年）、列伝十九（白文節・郭預・李行儉）に名が見える。

②俗有文字眞無文字＝『法華文句』巻第一上（T三四―三頁中）。

③吾聞解脱之中無有言説＝『法華玄義』巻第一下、「身子云『吾聞解脱之中無有言説』者、是約生滅四諦生生之法、明不可説。不可説名聖默然」（T三三―六八九頁中）、又巻第二上（T三三―六九六下）。

④曹溪不云乎、經有何過豈障汝念＝『景徳伝灯録』巻五・洪州法達章（T五一―二三八頁上）。

⑤從義＝一〇四二―九一。宋代天台宗の僧。常に禅・華厳・法相を痛撃し、天台教学の発揚につとめ、十一部五十九巻の著作を残した。現存するのは『三大部補注』十四巻、『四教儀集解』三巻、『始終心要註』、『義例纂要』七巻、『光明玄順正記』三巻、『光明文句新記』七巻である。『釈門正統』巻五、『仏祖統記』巻二一に伝がある。『東洋仏教人名事典』（新人物往来社、一九八九）参照。

⑥禅和貪看…十二部經是也＝出典未検。『釈門正統』巻五・従義伝、「如論禅宗則曰、達磨以楞伽四巻授可師云、我觀漢地唯有此經、仁者依行、自可度世。又云、藉教悟宗。世人何得妄説教外別傳。若看禅人語録、何不看佛語録。佛語録者、阿難等録佛金言、以成經也」（Z一二〇―0843下）。

⑦智者觀心誦經法云…＝『緇門警訓』巻八に天台智者大師「観心誦経法」を収めている。「伊字三點不縱不横、名大涅槃、名到彼岸、名第一義空平等大慧、是名念經正觀。三世諸佛、無不從此而生」（T四八―一〇八二頁上）。

⑧五祖＝章安灌頂（五六一―六三二）のこと。龍樹を高祖とし、慧文―慧思―智顗―灌頂と相承する相承説による。この説は『摩訶止観』巻第一上の冒頭に章安自身が言う所にして今師相承説と呼ばれる。『天台九祖伝』『釈門正統』『仏祖統記』などに受け継がれている。後には天台宗の名を初めて用いた中興の祖である湛然（七一一―七八二）を天台六祖とする説、即ち智顗―灌頂―智威―慧威―玄朗―湛然、また慧文を第一祖とする説などがある。

⑨文字是法身氣命…＝『法華玄義』巻第五上に章安の語として言われている。「私謂五品位是圓家方便、初欲令易解、準小望大、如三藏之五停心。初品圓信法界、上信諸佛下信衆生、皆起隋喜、是圓家慈停心、遍對治法界上嫉妬。第二品讀誦大乗文字、文字是法身氣命、讀誦明利是圓家數息停心、治法界上覺觀」（T三三―七三三下）。

⑩李世材＝元宗四年十二月（一二六三）守太傅門下侍郎平章事を以て致仕す（『高麗史』元宗四年）、忠烈王二年（一二七六）、元宗を宗廟にまつるとき、元宗の室に配享された（『高麗史』忠烈王二年）。『高麗史』高宗三十七年・四十年・四十三年・四十六年、元宗元年・三年・四年、忠烈王二年にこの人の記事有り。

⑪始終圓意＝『法華経』は小乗・大乗から円教の教旨を含むことからかくいう。『法華玄義』巻第七下に、蓮華喩の意味を明して、「唯此蓮華、華果俱多、可譬因含萬行果圓萬徳、故以爲譬」（T三三―七七二頁下）と言い、「始終圓満、開合具足、是

爲少分以蓮華爲譬也」（T三三―七七三頁上）と説かれる。

⑫開顕教旨超邁四時八教＝『法華経』の開三顕一・開迹顕本の教旨は四時八教より優れている。八教は天台の教判である化法の四教（蔵・通・別・円）と化儀の四教（頓・漸・秘密・不定）を併称したもの。四時は天台五時判のうち法華経が説かれる以前の四時（華厳時・鹿苑時・方等時・般若時）のこと。元蒙潤『四教義集註』巻上、「法華超八教外、出四時表」。